

那珂 46

- 那珂遺跡群第105次調査報告 -

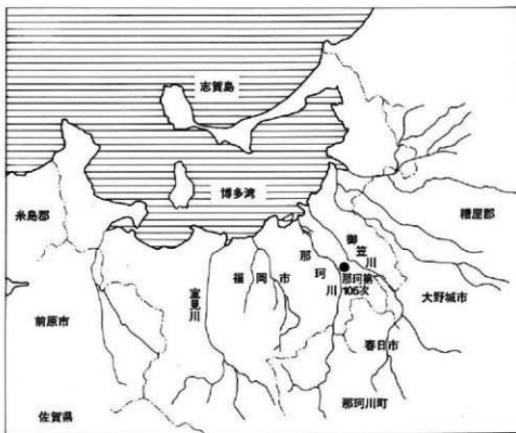
2007

福岡市教育委員会

那珂 46

- 那珂遺跡群第105次調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第936集



遺跡略号 NAK- 105
調査番号 0457

2007

福岡市教育委員会

序

福岡市の博多区は、弥生時代の「奴国」域にあたり、学史的に有名な国指定史跡板付遺跡を初めとして、数多くの重要な埋蔵文化財が包蔵されている地域です。またこの地域は、都心に近い住宅・商業地域として、近年都市化が著しく進んでいる地域で、それに伴う発掘調査も行われています。

今回報告する那珂遺跡群は、板付遺跡と同時期の弥生時代最古期の環濠集落や、九州最古期前方後円墳の那珂八幡古墳などが所在する、市内でも最も重要な遺跡の一つです。

本書は、平成16年度に実施した第105次調査の成果を報告するものであり、民間の共同住宅建設に伴って実施したもので、調査では古墳時代後期の集落跡と、中世後期の集落跡を調査しました。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助となるとともに、学術研究、文化財保護の普及啓発活動においても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、日本ミルクコミュニティ株式会社をはじめとして、関係各位のご協力に対して、厚く感謝の意を表します。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会
教育長 植木 とみ子

例　　言

- (1) 本書は、福岡市教育委員会が平成16年（2004）に福岡市博多区竹下5丁目59番1で実施した那珂遺跡群第105次調査の発掘調査報告書である。
- (2) 発掘調査は上記の主体により行われ、調査の担当は山崎龍雄が行った。
- (3) 遺構の実測は山崎龍雄、藤野雅基が主体となってを行い、また遺物の実測は山崎、上方高弘、境聰子が行った。
- (4) 本書に使用した図面の作成は山崎、岩崎由佳が行った。
- (5) 遺構の写真撮影は山崎が行い、出土遺物の写真撮影は文化財写真工房に委託した。
- (6) 本書に使用した方位は磁北であり、真北との偏差は $6^{\circ}18'$ 西偏する。
- (7) 本文では中世中国産磁器は博多分類、古墳時代須恵器は小田富士雄氏編年によっている。
- (8) 調査に係る記録類・出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用していく予定である。
- (9) 本書の執筆・編集は山崎が行った。

本文目次

	頁
第Ⅰ章 はじめに	
1 調査に至る経過	1
2 調査の組織	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境	
1 遺跡の立地と歴史的環境	3
第Ⅲ章 調査の記録	
1 調査の概要	4
2 遺構と遺物	4
3 おわりに	42

挿図目次

Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
Fig.2 調査区位置図 (1/6,000)	4
Fig.3 調査区全体図 (1/200)	6
Fig.4 建物SB41・75・85 (1/80)	7
Fig.5 建物出土土器 (1/3)	8
Fig.6 SC25・54 (1/60)	9
Fig.7 SC59・60 (1/60)	10
Fig.8 SC25・38・54・59出土土器 (1/3)	11
Fig.9 SC38・68・76 (1/60)	12
Fig.10 SC61・72 (1/60)	13
Fig.11 SC61・68・72・76出土土器 (1/3)	14
Fig.12 各住居跡出土玉類 (1/1)	15
Fig.13 SD01・08・24 (1/80)	17
Fig.14 調査区東壁、SD08土層 (1/60)	18
Fig.15 SD01・13土層 (1/40)	19
Fig.16 SD08-①出土土器 (1/3)	20
Fig.17 SD08-②・13出土土器 (1/3)	21
Fig.18 SE34・53 (1/40)	22
Fig.19 SE37・66 (1/60)	23
Fig.20 SE34・37出土遺物 (1/3)	24
Fig.21 SE53・66出土遺物 (1/3)	25
Fig.22 各遺構出土石製品 ① (1/3)	27
Fig.23 SK05・06・10・11 (1/40)	28
Fig.24 SK09・17 (1/40)	29

Fig.25 SK14・48・49・56 (1/40)	30
Fig.26 SK05・10・11・14・17・36・48・49出土遺物 (1/3)	31
Fig.27 SK50・51・71 (1/60・1/40)	32
Fig.28 SK50・51・55・56・58出土遺物 (1/3)	33
Fig.29 SK51出土挽き臼 (1/4)	34
Fig.30 ピット・柱穴出土遺物 (1/3)	35
Fig.31 他の遺構・遺構面出土遺物 (1/3)	36
Fig.32 各遺構出土土製品 (1/3・1/2)	37
Fig.33 各遺構出土金属製品 (1/2)	37
Fig.34 各遺構出土石製品 (1/3)	38
Fig.35 各遺構出土瓦① (1/4)	40
Fig.36 各遺構出土瓦② (1/4)	41

図 版 目 次

- PL. 1 (1)調査区から那珂八幡古墳を臨む(西から)(2)1区全景(西から)
- PL. 2 (1)1区全景(東から)(2)2区全景(南から)
- PL. 3 (1)SB41(南から)(2)SB75(西から)(3)調査区西側住居跡群(南東から)
- PL. 4 (1)SC38(南から)(2)SC54(南から)(3)SC25(西から)
(4)SC38発掘出状況(南から)
- PL. 5 (1)SC59(南東から)(2)SC60(南から)(3)SC59発掘(南東から)
(4)SC60発粘土出土状況(西北から)
- PL. 6 (1)SC61(南から)(2)SC68(南東から)(3)C61粘土・焼土出土状況(西から)
- PL. 7 (1)SD08・24(南から)(2)SD13北側段落ち(南西から)(3)D08土層(北から)
(4)同 遺物出土状況
- PL. 8 (1)D08コーナー部東壁(西から)(2)D08陸橋の状況(西から)(3)D13東側(西から)
(4)D13西側(東から)
- PL. 9 (1)SE37(東から)(2)SE66(南東から)
- PL.10 (1)SE34(東から)(2)SE53(東から)(3)SK05(北から)(4)SK06(南から)
(5)K10(北から)(6)K11(北から)
- PL.11 (1)SK12(南から)(2)SK49(南から)(3)SK17(北から)(4)K17遺物出土状況
(5)SK48(西から)(6)K71(東から)
- PL.12 (1)SK50(北西から)(2)同 西壁土層(東から)(3)同 遺物出土状況(4)SK51(北から)
(5)同 挽き臼出土状況(東から)
- PL.13 (1)SK56(東から)(2)SP292遺物出土状況(北から)
(3)掘立柱建物、竪穴住居出土遺物
- PL.14 各溝・井戸出土遺物
- PL.15 各井戸出土遺物
- PL.16 井戸、各土坑出土遺物①
- PL.17 各土坑出土遺物②
- PL.18 各遺構出土遺物

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経過

平成16（2004）年9月29日に日本ミルクコミュニティ株式会社より、福岡市博多区竹下5丁目59番1における共同住宅建設の為の埋蔵文化財事前審査願（16-2-631）が福岡市教育委員会に提出された。申請地は那珂遺跡群の中央部西側に位置する。申請地は平成8（1996）年に倉庫建設に先立って、埋蔵文化財の事前審査願（8-2-35）が提出され、試掘調査を行い、遺構を検出した。それを受け協議を行い設計変更で建築許可していたものである。したがって、開発に先立っては埋蔵文化財の記録保存が必要であるとして、申請者と協議を行い、発掘調査費用を申請者側に負担していただくということで、建物建設予定地部分を対象に調査を実施することとなった。

発掘調査は平成16年10月18日から開始し、平成17年1月7日迄行った。調査実施面積は申請面積871.95m²中の745m²である。また報告書作成作業は平成18年度に実施した。

調査にあたっては、申請者の日本ミルクコミュニティ株式会社をはじめとして、条件整備を担当した大勝建設など工事関係の方々に協力を受けた。記して感謝の意を表します。

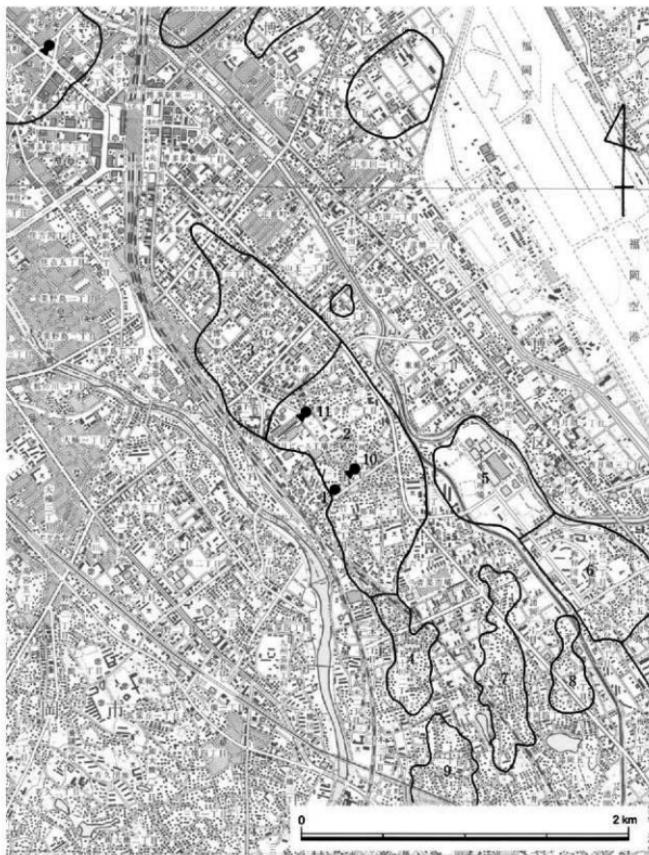
2. 調査の組織

調査の体制は以下のとおりである。

調査委託者	日本ミルクコミュニティ株式会社九州事業部 部長 井出 裕幸
調査主体	福岡市教育委員会
調査総括	文化財部埋蔵文化財課長 山口 讓治 (現)埋蔵文化財第1課長 山口 让治
事務担当	埋蔵文化財課調査第2係長 池崎 謙二 (現)埋蔵文化財第1課調査係長 山崎 龍雄 文化財整備課管理係 御手洗 清(旧) (現)文化財管理課管理係 鈴木 由喜
調査担当	埋蔵文化財課主任文化財主事 山崎 龍雄
調査作業	井上一雄、井上利弘、井上英子、大橋由美子、岡部安正、亀井宮子、北原由紀子、佐藤アイ子、佐藤俊治、鶴ヒサ子、未次 亮、堤 正子、西田文子、野田淳一、波賀久雄、平川正夫、藤野雅基、別府俊美、松永シゲ子、宮崎タマ子、持丸玲子、森田祐子、山内恵、山崎光一、山下嘉人
整理作業	上方高弘、境 聰子、岩崎由佳、大賀順子、増永好美

第105次調査の概要

遺跡番号	調査番号	調査地番	申請面積	調査面積	調査原因	調査期間	調査担当
NAK-105次	0457	福岡市博多区竹下5丁目59番1	871.95m ²	745.0m ²	共同住宅	2004.10.18~05.01.07	山崎龍雄



- | | | | |
|-------------|------------|----------|----------|
| 1. 第105次調査区 | 2. 那珂遺跡群 | 3. 比恵遺跡群 | 4. 五十川遺跡 |
| 5. 那珂君体遺跡 | 6. 板付遺跡 | 6. 諸岡A遺跡 | 8. 諸岡B遺跡 |
| 9. 井尻B遺跡 | 10. 那珂八幡古墳 | 11. 刺塚古墳 | |

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地と歴史的環境 (Fig.1)

福岡平野は、西は背振山塊から派生する長垂丘陵、東は犬鳴・三郡山地に囲まれた地域で、南北に貫流して博多湾に注ぐ室見川・桶井川、那珂川・御笠川、宇美川・須恵川・多々良川などの中小河川の沖積作用によって形成された沖積平野と、油山北部台地・鴻巣丘陵や、諸岡台地・糟屋台地などの丘陵・台地部によって形成された平野である。この平野はまた地形的に西から早良平野・福岡平野、糟屋平野に細分され、ここで言う狭義の福岡平野は那珂川と御笠川、月隈丘陵に囲まれた部分を指す。

那珂遺跡群はこの福岡平野の北側、那珂川と御笠川に挟まれた最大標高10m程を測る洪積台地上に立地する。この台地は内陸部の春日市域まで断続的に続き、阿蘇起源とされるASO-IV火砕流によって形成されたものである。

那珂遺跡群は平成19年1月現在、第114次調査迄行われている。遺跡群で一番古い時期は遺跡群南部の第23・41次調査区など数か所で旧石器時代の遺物が出土しているが、遺跡群全体としては縄文時代終末までは出土した遺構・遺物は少ない。周辺でも、諸岡遺跡や板付遺跡などで旧石器時代の包含層・遺物が調査されている。この遺跡が発展するのは弥生時代早期(縄文時代晚期終末)頃からで、遺跡群の南端の第37次調査区で、板付遺跡の環濠と同時期の最古期の環濠集落が出現する。その後、弥生時代後期にかけて集落は全面的に拡大し、北側に隣接すると比恵遺跡と一体化した集落となる。遺跡規模は隣接する比恵遺跡と合わせると1.4haを測る。那珂遺跡群では環濠集落は台地中央部の第67次調査区でも検出されている。終末期から古墳時代初期にかけては比恵遺跡にかけて全長1.5kmに及ぶ道路状遺構が周囲一帯の調査から推定されている。遺跡内では櫛塙墓地群は現在7か所で確認されているが、いずれも規模は小さく、金隈遺跡のように数百基が密集する大規模な墳墓域は確認されていない。

古墳時代も引き続き集落は全域に展開する。ただ台地中央高所部には福岡平野最古期の前方後円墳である那珂八幡古墳が造営される。古墳は全長約85mを測り、調査された第二主体部の木棺から三角縁神獣鏡が1面出土した。またその周辺には同時期の方形周溝墓が確認されており、同時に古墳周辺が墳墓域であったことが分かる。後期になると墳墓域は北側に移り、アサヒビル工場地内に東光寺刻塚古墳が作られる。北側の比恵遺跡群内では大型建物群や多重の柵に囲まれた高床倉庫群が存在し、その規模や区画から『日本書紀』宣化天皇元年五月一日条に見える那津官家の関連する遺構と思われる。また那珂遺跡群の南部を中心にして飛鳥～奈良時代の大型建物跡や柵や溝に囲まれた方形区画が各所にあり大宰府の全身である筑紫大宰や那珂都衙の可能性が指摘されている。瓦葺き建物があったようで、調査でも瓦が多く出土している。

中世以降は一般村落に変化していく。遺構は全域に確認できるが、量はそれほど多くない。ただ中世でも後半期になると、大溝(堀)を方形に巡らした屋敷地が各所に認められ、防御的色彩が強くなる。菅崎宮座主城戸清種が記した『豊前覺書』(1615)によれば、「天正九年辛巳三月六日、那珂郡内之内、麥野村御捕誘被成候、其子細八、廣門衆那珂ノ郡へ節々乱妨ニデ申し候あいだ、そのおさへとして、人數ヲ可被籠当置タメ也、・・・」とあり、国際貿易港博多をめぐる争いで、度々戦火に見舞われた周辺地域の自衛の状況を示すものといえよう。

第Ⅲ章 調査の記録

1. 調査の概要 (Fig.2・3, PL.1・2)

本調査区は那珂八幡跡群の中央部西側に位置する。地形は南西側が高く、標高は遺構面南側高所部で8mを測り、北と東側に向かって傾斜する地形である。北側境界は水路で区切られる。調査区の北東側100mには那珂八幡古墳が所在する。調査区周辺の調査例では、南側の道路建設に伴って、第19・32・34次調査が行われ、弥生時代から戦国時代にかけての遺構・遺物や、那珂八幡古墳の周溝なども検出されている。道路を挟んだ南側周辺でも第43・54・65・68次調査などが行われている。

調査は建築工事が敷地全域に及ぶことから、ほぼ全域を調査対象として行った。調査は廃土を場内処理で行う関係から、東西二分割して行った。遺構面は西側高所部が表土下10~30cmの鳥栖ローム土で、北・東側に向かって深くなる。検出した主な遺構は古墳時代後期の竪穴住居跡約8棟、掘立柱建物跡3棟、地下式塙10基、井戸3基、中世溝3条などである。

遺物は井戸を中心にパンコンテナで39箱出土した。古墳時代から中世の土器が大半であるが、古代の須恵質・土師質の瓦がかなり出土した。

2. 遺構と遺物

① 掘立柱建物 (SB)

SB41 (Fig.4, PL.3)

調査区東側で検出した主軸を略南北に取る2×2間の縦柱建物で、SK11やSD24に切られる。確認規模は桁行長3.62~3.78m、梁間長2.47~2.70mを測る。柱穴掘方は円形又は楕円形。直径は0.5~0.7m程、深さは0.1~0.4mと浅く、側柱の柱穴は深い。埋土は黒褐色粘質土。柱痕跡は明褐色ロームブロックを混入し、直径0.2m程を測る。出土遺物は各柱穴から土器の細片が少量出土している。

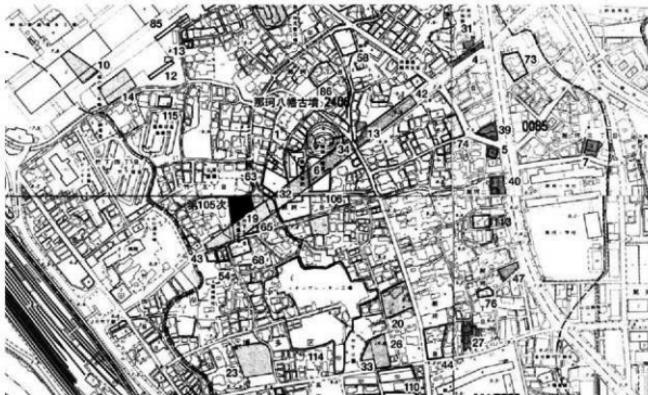


Fig. 2 調査区位置図 (1/6,000)

SB75 (Fig.4, PL.3)

調査区西側で検出した主軸を略東西に取る1×2間の側柱建物。確認規模は桁行長5.0m、梁行長3.2~3.45mを測る。柱穴掘方は方形又は円形で、直径は0.55~0.7m、深さは0.15~0.4mを測る。柱痕跡は確認出来たもので、直径0.2mを測る。埋土は黒色粘土で橙色ロームブロックを混入する。

出土遺物 (Fig.5, PL.13) 弥生時代中期頃の土器片が各柱穴から出土している。

1・2は逆L字形口縁の甕。1は細片。2は1/8片で、復元口径28.2cmを測る。調整は1がヨコナデ、2は口縁部ヨコナデ、胴部外面タテハケ目、内面ヨコナデ。色調はいずれも橙色で、胎土は2が砂粒が多く含む。

SB85 (Fig.4)

調査区中央部で検出した主軸を略南北に取る2×3間の側柱建物。規模は桁行長7.45~7.50m、梁間長3.95~4.00mを測る。柱穴掘方は略方形又は円形で、直径は0.45~0.7m、深さは0.3~0.7mを測る。柱痕跡が確認出来たものでは柱径0.2mを測る。埋土は黒褐色粘質土である。

出土遺物 (Fig.5, PL.13) 各柱穴から弥生土器や、古墳時代土器・須恵器片が少量出土。

3~5は須恵器。3は壺1/3片。復元底径8.4cmを測る。調整はナデと思われるが摩滅が進む。4は壺身1/5片で、復元口径10.8cm、器高4.1cmを測る。外底部は回転ケズリ、体部から口縁部回転ナデ、内面は自然釉がかかり調整は不明。外底ヘラ記号がかすかに残る。5は腹部1/4片。復元底部径8.6cmを測る。調整は体部内外回転ナデ、外底部回転ケズリ。肩部に沈線が巡る。外底には×のヘラ記号がある。色調は3は灰白色、4は灰色、5は褐灰色である。焼成は3が不良。

② 竪穴住居跡 (SC)

SC25 (Fig.6, PL.4)

調査区南壁で検出した方形住居跡の一部。確認長2.6mを測る。大半が道路にかかり、全容は不明であるが、壁際に溝が巡り竪穴住居跡とした。南側の第19次調査区で竪穴住居跡の記述はないが、西壁の延長上に小溝が確認されており、住居跡があったと思われる。埋土は黒色粘質土である。

出土遺物 (Fig.8) 弥生土器や古墳時代後期土器・須恵器の細片が出土している。

6は須恵器の壺身細片。調整は回転ヨコナデ。色調は褐灰色を呈し、胎土は精良、焼成は良好。

SC38 (Fig.9, PL.4)

調査区中央北側で検出した平面形が方形の住居跡。全体に削平を受け、且つ西側はSE37、東側は現代擾乱、中央を地下埋設管に切られ残りは悪い。周壁溝と壁面の残りや、床面に残る焼土面から竪穴住居跡と判断した。北側壁中央沿いに焼土と灰白色粘土、炭化物などがあり、竈の残存部分であると判断した。規模は残存部分から推定して一辺が5.6mである。主柱は4本柱で、柱間距離は2.7~3.1m程度である。床は地山ローム粘土の貼り床で、撤去した後、更にピットなどを確認した。

出土遺物 (Fig.8) 床面、貼り床などから古墳時代土器・須恵器が少量出土している。

7は須恵器の壺蓋。1/8片で、復元口径16.0cmを測る。口縁部から内面回転ナデ、天井部は雄なナデ。色調は褐灰色で、胎土は精良。8世紀前半で時期がやや新しい。

SC54 (Fig.6, PL.4)

調査区西側で検出したSC61を切る方形の住居跡。規模は東西長3.80m、南北長3.90m、残存壁高4~5cmを測る。全体に削平を受け、又他柱穴などによる切り合いもあり、遺構の残りは悪い。竈は明確には確認出来ていないが、北壁中央部外側SC61の部分に、焼土や粘土・炭化物が固まって検出されており、竈を外側に張り出して構築した可能性がある。主柱穴は4本柱、柱間距離は1.60m~

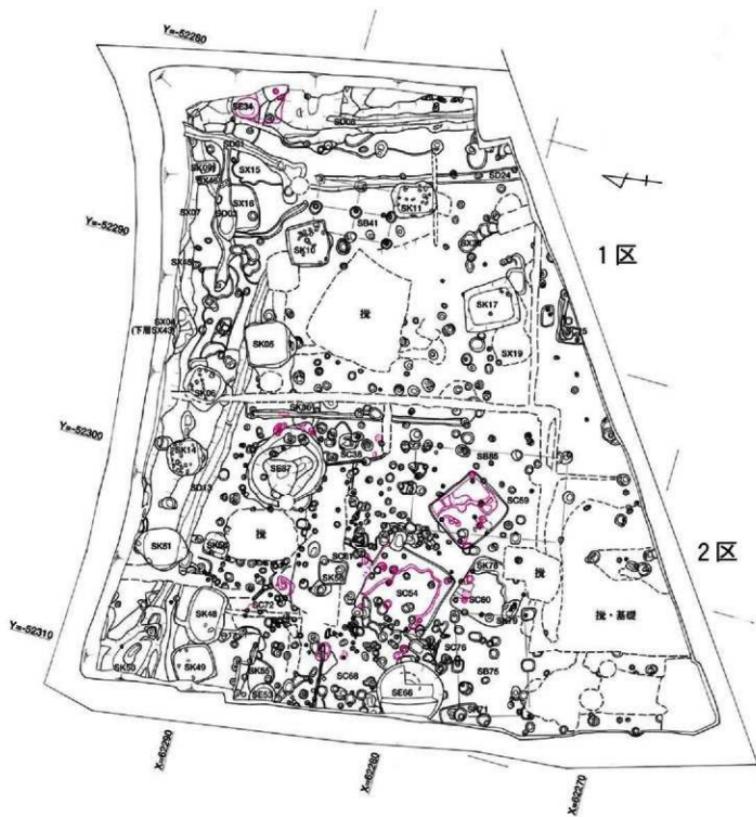


Fig. 3 調査区全体図(1/200)

1.90m、深さは0.4m程を測る。床面は地山ローム粘土で貼り床されており、それを撤去すると帯状に3~4cm程深くなる。

出土遺物 (Fig.8・12・32, PL.13) 古墳時代の土師器・須恵器を中心に、弥生土器などを交えて出土している。総量としては少なく、かつ細片が多く、図示出来るものは少ない。

8-10は須恵器。III b - IVa期頃のもの。8は坏身细片。調整は回転ナデ。9は坏蓋天井部1/4片。調整は天井部外面は回転ケズリ、その他は回転ナデ、内面は不整ナデ。10は櫛口縁部細片。調整は

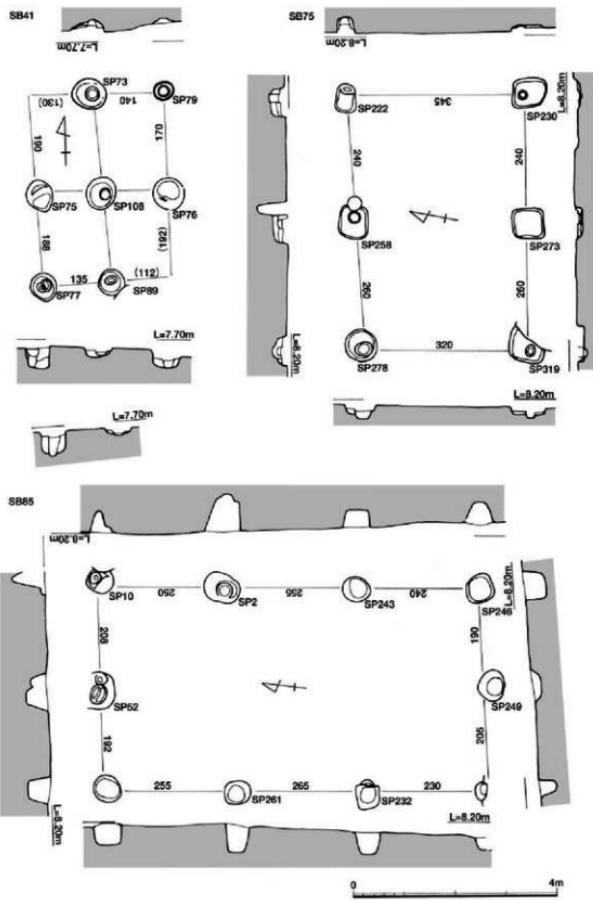


Fig. 4 建物S B41・75・85 (1/80)

回転ナデ。色調は8・10は灰色、9は褐灰色を呈す。胎土は、8・9は精良であるが、10は微粒の白色粒子・黒色粒子を含む。焼成はいずれも良好。213は主柱SP213出土。棒状の把手。残存長3.8cm、最大径1.5cmを測る。色調は明褐色を呈し、胎土は精良。

B1～B4は滑石製白玉。B1以外は破片である。B1は直径0.6cm、最大厚0.3cmを測る。孔径は0.2cmを測る。B2～4は直径0.65cm、0.5cm、0.55cm、厚さ0.15cm、0.3cm、0.15cmを測る。

SC59 (Fig.7, PL.5)

SC54の南東側で検出したSB85柱穴が切る方形住居跡。規模は東西長3.10m、南北長2.88m、残存壁高は最大で10cm程を測る。後世の削平がひどく、遺構の残りは悪い。竈は北西壁中央部沿いに焼土や粘土・炭化物が固まって検出されており、壊れではいるがこの部分に竈が構築されたのであろう。主柱穴は床面では確認出来なかった。おそらく壁外部分にあったのであろう。床面は地山ローム粘土で貼り床されており、それを撤去すると北西壁沿いが最大0.2m程深くなる。

出土遺物 (Fig.11) 古墳時代後期の土師器。IVa期の須恵器が少量出土した。

11～15は須恵器。11・12は坏蓋。11は1/8片で、復元口径13.4cmを測る。12は1/6片で、復元口径12.0cmを測る。11・12の調整は天井部回転ケズリ、その他は回転ナデ。色調は暗灰黄色、灰黄色を呈し、胎土は白色粒子を含む。焼成は良好。13～15は坏身。13は1/4片で、復元口径10.2cmを測る。14・15は坏身口縁部細片。調整は12は外底部回転ケズリ、その他は回転ナデ。内底はナデ。14・15は回転ナデ。色調は暗緑色、赤灰色、灰白色を呈し、胎土は白色微粒子を多く含む。焼成は良好。16は弥生土器壺の口縁部1/8片。復元口径30.0cmを測る。器表面は摩滅し、かろうじて外面にハケ目が残る。17は土師器。口縁部は欠損するが鉢。調整は外面ハケ目、内表面は剥落し不明。16・17の色調は鈍い黄橙色を呈し、胎土はいずれも粗砂を含む。焼成は16は不良、17は普通。

SC60 (Fig.7, PL.5)

SC54の南側で検出した小型の方形住居跡。規模は東西長3.04m、南北長3.04mを測るが、後世の削平で、壁はほとんど残らず、貼り床の範囲から復元した。竈があったよう北壁やや沿い西寄りに焼土面や粘土・炭化物が固まって検出された。この部分に竈が構築されたのであろう。主柱穴は明確には確認出来なかった。床面は地山ローム粘土で貼り床されており、それを撤去すると北東隅 (SK78) と、南壁沿い (SK79) が浅く (最大深0.2m程) 土坑状に深くなる。出土遺物は古墳時代土

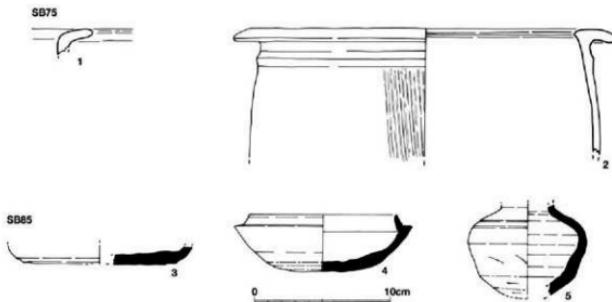


Fig. 5 建物出土土器 (1/3)

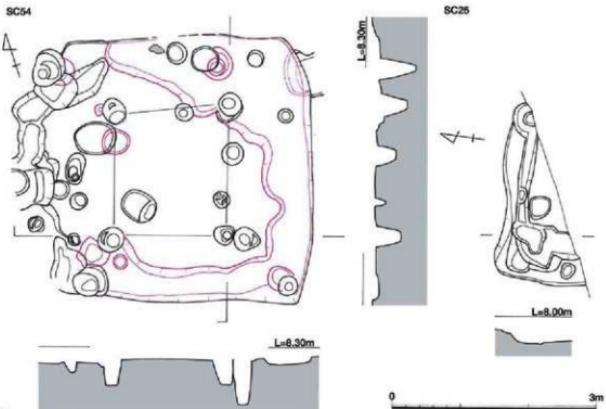


Fig. 6 SC25・54 (1/60)

師器・須恵器の細片が、貼り床下土坑からは弥生土器細片が少量出土しているが、図示出来なかった。

SC61 (Fig.10, PL.6)

SC54の北側で検出した、SC54に切られる方形住居跡。井戸や擾乱があり、全容は確認できないが、規模はかろうじて残る部分から一辺が4m程と推定出来る。南東隅には焼土面とその周りに粘土ブロック、北壁中央沿いに焼土面と灰白色粘土ブロックが確認出来た。これらの部分に竈があったと思われる。北壁部の焼土面がSC61の竈、南東隅のものが、SC59に伴う可能性がある。調査時は複数の住居跡の重なりを考えたが、住居の分別が出来ず。SC62を合わせてSC61として報告する。

出土遺物 (Fig.11・12, PL.13) 古墳時代の須恵器・土師器が少量出土している。

18～20は須恵器。18・19は环身。いずれも口縁部小片。18は復元口径約11cm程か。口縁部は立ち上がり、IIIb期頃のものか。調整はいずれも回転ヨコナデ。色調は灰色で、胎土は白色粒子を少量含む。焼成は良好。20は高坏脚部1/3片。復元底径9.0cmを測る。調整は回転ナデとナデであるが、脚部にはシボリ痕が残る。21・22は土師器。21は壺の口縁部1/9片。復元口径24.2cmを測る。調整は外面ハク目後ナデで、内面は摩滅し不明。色調は純い黄橙色を呈し、胎土は精良、焼成は良好。22は高坏の脚部。摩滅がひどく調整は不明。色調は淡橙色を呈し、胎土は精良、焼成はやや不良。

B5～B7は滑石製白玉、床面や焼土中からの出土。B5・B6は完形。直径0.7cm、0.5cm、最大厚さ0.4cm、0.3cmを測る。

SC68 (Fig.9, PL.6)

西壁際中央で検出したもので、SE66や、SC54・76柱穴と切り合い、全容は不明。削平がひどく、壁はほとんど残らず、北壁周溝などの存在から竪穴住居跡と判断した。規模は部分的に残る溝やコーナー部分から復元して、南北不明、東西長4m以上を測る。北東床面に焼土面がある。貼り床で北東

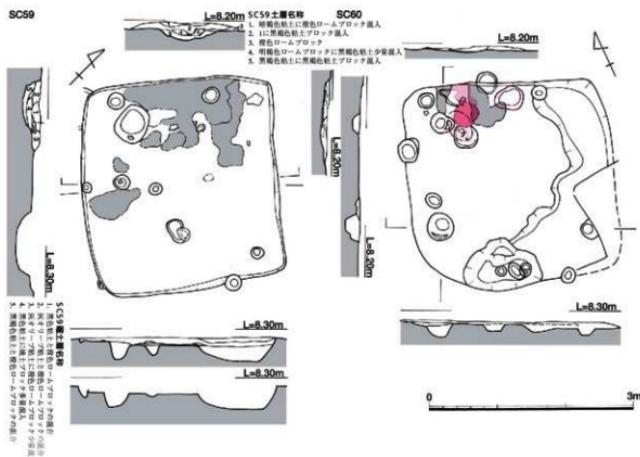


Fig. 7 SC59・60 (1/60)

隅は一段下がる。主柱は明確には確認出来なかったが、4本柱と推定する。

出土遺物 (Fig.11・12, PL.13) 古墳時代土師器・須恵器が少量出土している。

23～26は須恵器。23～25はIII b期の坏蓋。23・24はほぼ同じ形態。23は1/8片で、復元口径12.4cmを測る。調整はいずれも回転ナデ。色調は黒色、暗緑灰色を呈す。胎土は精良、焼成は良好。25は口縁と天井部に軽い段を有す。調整は回転ナデ。色調は灰色を呈し、胎土は白色微粒子を若干含む。焼成は良好。26はV期の坏身底部1/4片。復元底径8.2cmを測る。調整は底部回転ケズリ後ナデ、体部は回転ナデ。色調は灰白色を呈し、胎土は精良、焼成はやや不良。27は土師器の盤の口縁部1/10片。復元口径2.6cmを測る。摩滅がひどく調整は不明。色調は橙色を呈し、胎土は精良、焼成は不良。B8は勾玉、全長1.4cm、最大幅0.8cm、厚さ0.2～0.3cmを測る。丁寧な仕上げである。色調は灰白～灰色を呈し、石材は滑石か。

SC72 (Fig.10)

調査区西側で検出したSC61に切られる方形住居跡。削平がひどく、かろうじて残った北壁周溝と、竈があったと思われる焼土面から住居跡と判断した。主柱穴は4本で、柱穴間距離は南北2.45m、東西3.05m、柱穴の深さは0.6～0.7mと深い。規模は不明であるが、北側主柱と北壁との距離が1.1mを測り、それから5m前後の規模になると推定する。

出土遺物 (Fig.11・12) 焼土面内や周溝から古墳時代土師器・須恵器が少量出土している。

28は瓶肩部細片。外面厚く自然釉がかかるが平行タタキ後カキ目、内面當て具痕が残る。色調は褐灰色を呈し、胎土は精良、焼成は良好。

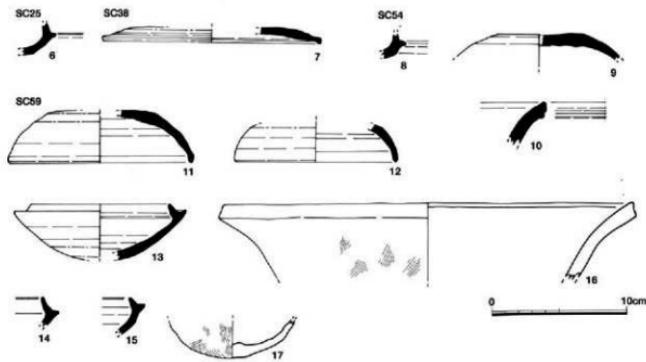


Fig. 8 SC25・38・54・59出土土器 (1/3)

SC76 (Fig.9)

調査区西壁際で検出したもので、SC68と重複し、同一の可能性があるが、壁の方向性や、同一とすると南北距離が6mと、後期の住居としては大き過ぎることなどから別住居とした。SC68床面の焼土面の南で部分的に一段下がる所があり、そこを壁の残りとすると4m程の規模となる。主柱の数や竈の有無は不明。

出土遺物 (Fig.11, PL.13) 古墳時代土師器・須恵器が出土。図示するのは床面で出土したもの。29~32は須恵器。III b期のものか。29は壺の蓋か。完形品で口径8.9cm、器高3.5cmを測る。調整は天井部外面回転ケズリ、ヘラ記号がある。口縁部内外面は回転ナデ、内天井は不整ナデ。30は壺蓋1/5片で、復元口径13.0cmを測る。調整は回転ナデ。色調は29が黄灰色、30が灰色を呈し、いずれも胎土は白色粒子を少量含み、焼成は良好。31~32は甕下胴部片。器壁の厚さが異なり別個体である。31は外面密な平行タタキ、32は外面木目直交の平行タタキ後ナデで、内面は同心円状の当て具痕が残る。色調は31が青灰色、32が暗青灰色を呈し、胎土は31が精良、32は最大5mmの砂粒を含む。焼成はいずれも良好。33は土師器の鉢か。体部1/4片で、調整は器壁が摩滅し不明。色調は橙色を呈し、胎土は砂粒を多く含み、焼成は普通。34は高壺脚4/5片。底径は10.5cmを測る。調整は外面ケズリ後ナデ、内面摩滅し不明。色調は浅黄橙色を呈し、胎土は精良。焼成は不良。

③ 溝状造構 (SD)

SD01 (Fig.15)

調査区北東隅で検出した南北方向に延びる小溝。北側段落ち迄延び、確認長6m以上、幅は0.4~0.7m、深さは0.2~0.35mを測る。埋土は暗灰黄色土~黄灰色土である。出土遺物は図示していないが、近代までの遺物を含む。

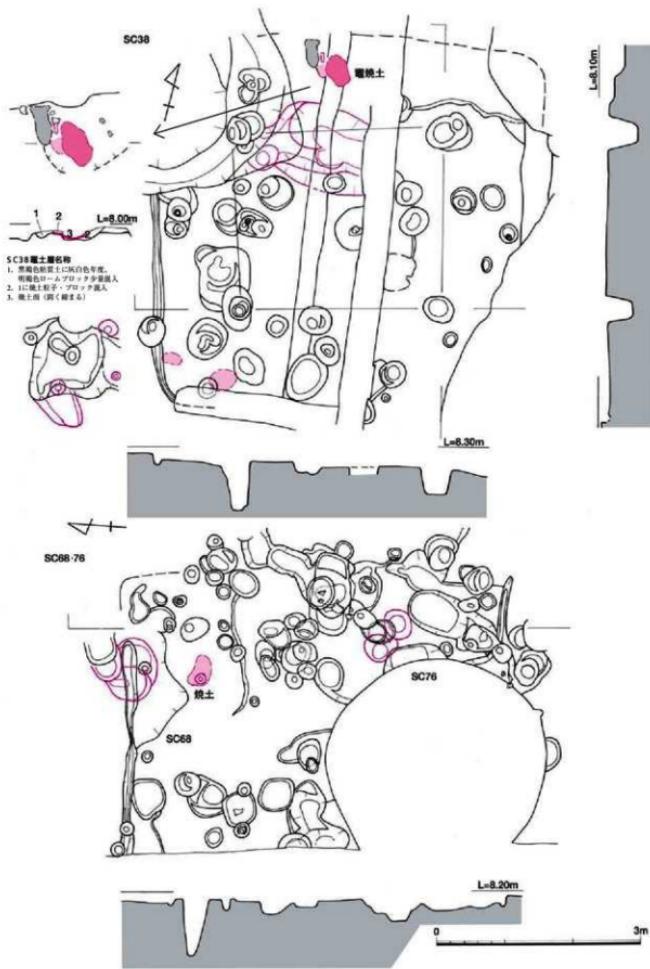


Fig. 9 SC38・68・76 (1/60)

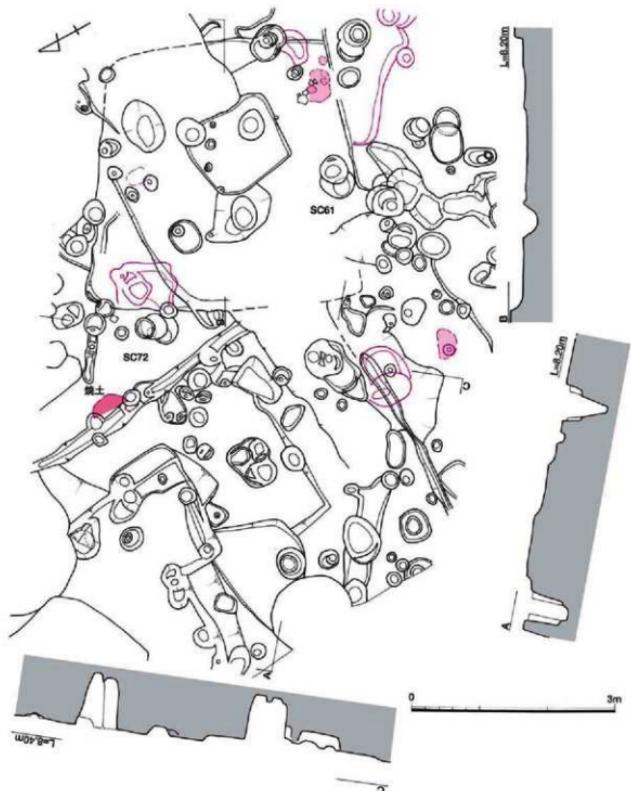


Fig. 10 SC61・72 (1/60)

SD03

調査区北東側、SD01に切られる小溝で、確認長8.5m、最大幅0.26～1.2m、深さ0.1mを測る。埋土は暗褐色土。出土遺物は図示していないが古墳時代から近世迄の遺物を含む。

SD08 (Fig.13・14, PL.7・8)

調査区東側で検出した南北方向の溝。この溝は南側の第19次、第65次調査区から続き、北側段落

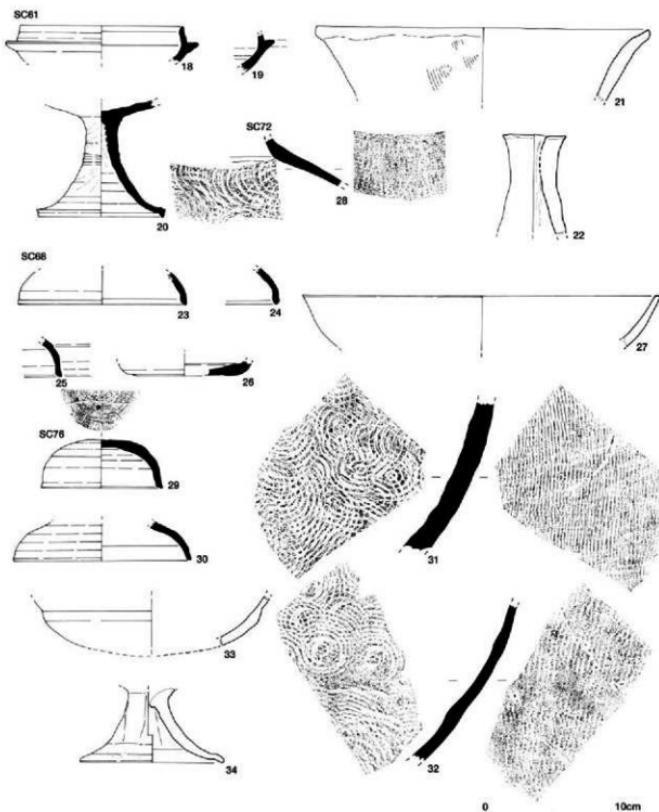


Fig. 11 SC61・68・72・76出土土器 (1/3)

ちまで続くが、途中で東側に分岐する。方向的には東側の第32次、第62次調査区の東西大溝に繋がると考えるが、第19次と第32次調査区の間が未調査区で、確認は出来ない。溝幅は南側で1.5m、東に曲がる東壁で3.90m、深さは南壁で0.8m、東に曲がる分岐点で1.45m測り、深くなる。埋土は上層が暗褐色粘質土、中層は純い黄褐色から灰黄褐色粘土、下層は軟質の暗灰黄色粘土となり、下層ほど粘性は強くグライ化するが、粗砂などは含まない。この分岐点の西側は明黄褐色ロームブロックで

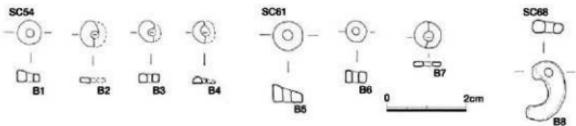


Fig. 12 各住居跡出土玉類 (1/1)

人為的に盛上げた陸橋状の高まりがあり、出入り口になる可能性がある。この高まりの北側はまた下がり段落ちまで続く。

出土遺物 (Fig.16・17・22・23, PL.14) 古代から中世末の土師器・須恵器・輸入陶磁器・瓦質土器・瓦、土師質土器などで、一部近世初めのもの含む。土層ベルト南側出土を1区、北側出土を2区で報告する。

35～42は1区出土。35は龍泉窯系青磁碗1/4片。復元口径15.6cmを測る。鏡連弁はヘラによる片彫り。釉は厚めにかかる。36は明の青花磁器碗細片。景德鎮窯で16世紀の口縁部が内湾気味に立ち上がる饅頭心タイプのものか。外面には花文、口縁部内外面には2条の界線が巡る。37は朝鮮王朝の陶器皿底部。底径5.6cmを測る。内外面灰オリーブの釉がかかり、内面には砂目痕が四か所ある。38は陶器の櫛口縁部細片。内面白白色粘土が巡る。色調は褐灰色を呈し、胎土は粗砂を多く含む。39・40は瓦質土器。39は湯釜の耳。外面ナデでススが付着する。色調は灰色を呈す。胎土・焼成いずれも良好。40は擂鉢体部細片。内面にスリ目がある。色調は灰色で、胎土・焼成は良好。41・42は土師質土器。41は擂鉢底部細片で内面にスリ目が残る。色調は純い黄色、胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は普通、42は鍋口縁部1/10弱で、復元口径30.6cmを測る。調整は外面ナデ、内面細かいヨコハケ目。色調は純い橙色を呈し、胎土は精良、焼成は良好。39・42は上層、41は中層、40は最下層出土。

43～53は2区出土。43・44は中国産青磁碗の底部。43は1/4片で、底部径7.2cmを測る。灰オリーブ色釉が厚めにかかる。16世紀のもの。44は底部1/4片で、復元底径6.5cmを測る。焼成は不良で、発色の悪い灰オリーブ釉がかかるが見込みは蛇の目状に釉を撞き取る。高台はケズリを加え露胎。胎土は精良、焼成は良好。45～47は白磁。45は碗底部、底径は6.8cmを測る。高台部はケズリで露胎。体部から見込みは透明感のある灰オリーブ色釉がかかるが、蛇の目釉ハギする。胎土・焼成は良好。46は皿底部片で、復元底径6.2cmを測る。白色釉がかかるが、置付きは露胎。47は小碗1/2片で、復元口径8.0cmを測る。底部は霧笛底状にケズリ出す。灰オリーブ釉が内外面かかるが、体部下半から底部は露胎。48～50は土師器。48は碗底部1/3片で、底径9.0cmを測る。調整は摩滅し不明。色調は橙色を呈し、胎土は精良、焼成は不良。49は皿1/4片。復元底径9.8cmを測る。器表は摩滅し、調整は不明。50は3/4片で、口径10.8cmを測る。調整は体部回転ナデ、外底部は回転糸切りで、板状圧痕が残る。色調は49は灰白色、50は灰黄褐色を呈し、胎土はいずれも精良、焼成は49は不良、50は普通。51・52は瓦質土器。51は火鉢口縁部細片。外面二条の突帯が付く。52は擂鉢体部片。内面四条のスリ目、外面ハケ目と指押痕が残る。色調は51は灰色、52は暗オリーブ灰色を呈す。胎土は51は白色微粒子を含み、52は精良。焼成は51は良好、52は普通。53～55は土師質土器。53は擂鉢1/6片。復元口径28.6cmを測る。調整はナデで、外面ハケ目が残り、内面はナデで四条のスリ目が残る。色調はオリーブ黄色で、ススが付着する。胎土は微砂粒を少量含み、焼成は良好。54・55は鍋。

54は口縁部1/9片で、復元口径28.8cmを測る。調整は外面ナデ、内面はヨコナデとハケ目で、外面スカが付着する。55は1/3片で、復元口径29.8cmを測る。外面スカが付着するが、内面細かいヨコハケ目を施す。色調は54が純い橙色、55は純い黄橙色を呈し、胎土は54は黒色・赤色粒子を多く含み、55は3mm以下砂粒を多く含む。54・55の焼成は良好。43・44・46・50・54は上層出土。47・49・53は中層出土。45・51・52・55は下層出土。48は底面出土。

S1は軽石製品。全長8.6cm、最大幅4.1cm、厚さ2.2cmを測る。両木口部と右側面に抉り加工面がある。浮子に使用した可能性がある。S2は石鍋の再加工品。銚部の一部で、割れ口を磨いて再加工している。最大長6.2cm、最大幅4.8cm、厚さ1.6cmを測る。

SD13 (Fig.15, PL.8)

調査区北側を東西に延びる小溝。土坑SK50・05・06・51などに切られる。確認長は20m、溝幅は1m、深さは0.3~0.7mを測る。この溝はSK10の西側で立ち上がる。溝断面は逆台形を呈し、埋土は暗褐色土で、明褐色ロームブロックを混入する。

出土遺物 (Fig.17, PL.14) 弥生土器から古墳時代土師器・須恵器、中世土師器、輸入陶磁器などが出土している。種類毎に報告する。

56・57は青磁碗底部1/2片。復元底径6.0cm・5.3cmを測る。56は灰オリーブ色釉、57はオリーブ灰色釉がかかるが、高台置付きから底部は露胎。見込みに巻線が巡る。胎土色調は灰白色を呈す。58は白磁碗底部1/2片。見込みに櫛描き文が入る。透明感のある釉がかかるが、高台内部は露胎。胎土色調は灰白色を呈す。59は六角形を呈す白磁番合の小片。最大径6.2cmを測る。体外面上には縦の櫛目が入る。内面に光沢のある線がかった灰白色釉がかかる。胎土の色調は灰白色を呈す。60~66は土師器。60~63は小皿。口径は8.0cm・8.2cm・8.8cm、8.7cm、器高は1.7cm、1.95cm、1.6cm・1.5cmを測る。いずれも口縁から体部は回転ナデ、外底部は61が静止糸切りの他は回転糸切り離してあるが、60は後にナデを加え、63は板状圧痕が残る。色調は60・61は純い黄橙色、62・63は浅黄橙色を呈す。胎土はいずれも精良、焼成は61以外は不良。64~66は壺。いずれも口縁部を一部欠く。口径は復元で13.1cm・12.9cm・12.0cm、器高2.8cm・3.0cm・3.0cmを測る。いずれも器表は摩滅し調整は不明。外底部は回転糸切り離してある。色調は64は純い黄橙色、65・66は浅黄橙色を呈す。胎土は66が微砂粒を多く含む以外は精良。焼成はいずれも不良。67は瓦質土器香炉口縁部小片。復元口径14.0cmを測る。外面には連続する回文と渦巻きスタンプ文が付く。調整はナデ。色調はオリーブ黒色を呈し、胎土は精良、焼成は普通。68は土師質土器鏡1/3片。復元口径は26.2cmを測る。調整は外面ナデ、内面はヨコハケ目が密に入る。色調は褐色から褐灰色を呈し、胎土は粗砂粒を多く含み、焼成は良好。69・70はII期の須恵器环身。69は1/3片で、復元口径11.6cm、70は1/7片で9.5cmを測る。調整はいずれも回転ナデ。色調は灰色、黃灰色を呈し、胎土はいずれも白色・黒色微砂粒を含み、焼成も良好。71は弥生時代前期未頃の腰底部1/2片。復元底径6.7cmを測る。外面はタテハケ目、内面と底部はナデ。色調は71は橙色を呈し、胎土は砂粒を多く含み、焼成は普通。72は高环脚部。器表は摩滅し不明。色調は橙色を呈し、胎土は精良、焼成は普通。

SD24 (Fig.13, PL.7)

調査区東側、SD08の西側を並行して南北に延びる小溝。第19次調査区から続くもの。確認規模は10.5m、幅は0.4~0.7mを測り、深さは最大で0.1m程と浅い。埋土は暗褐色粘質土である。

出土遺物 (Fig.33, PL.14) 古代の土師器・須恵器が少量の他、耳環が出土しているが、土器は細片で図示出来ない。

M1は耳環。外径2.7cm、内径1.7cm、径0.5cmを測る。表面緑色錆がひどいが、金箔が一部残る。

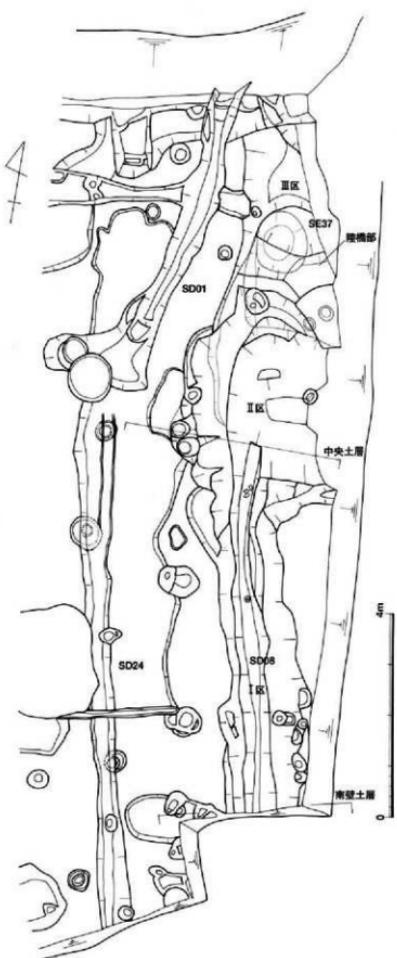


Fig. 13 SD01・08・24 (1/80)

④ 井戸 (SE)

SE34 (Fig.18, PL.10)

調査区東側のSD08のコーナー部分北側の陸橋部造成土（明黄褐色ローム）除去後に検出した平面橢円形状の素掘り井戸。規模は直径1.02～1.20m、深さは2.55mを測る。埋土は上層が明黄褐色地山ロームブロックで人為的に埋められた状況を呈すが、下層は暗灰色粘土で、湧水がある。

出土遺物 (Fig.20, PL.14・16)

弥生土器、古墳時代～古代土師器、須恵器、中世土師器、輸入陶磁器などが出土しているが、それ程量は多くない。

73～75は白磁。73はVI類の小碗1/13片で、復元口径13.8cmを測る。胎土は灰白色を呈し、光沢のある透明釉がかかる。胎土、焼成は良好。74はIV類の玉縁口縁1/8片で、復元口径16.6cmを測る。内外面浅黄橙色釉がかかるが、焼成がやや悪いのか、釉の発色が悪い。75はVI類の碗1/12片。復元口径17.6cmを測る。内面模描き文様が入る。灰白色の透明釉がかかるが、表面細かい気泡が入る。白磁は11世紀後半～12世紀前半のものか。

SE37 (Fig.19, PL.9)

調査区中央で検出した大型の橢円形状の素掘り井戸。二段掘りで規模は上面で3.40～3.85m、1.2m程下がったテラス部で1.55×1.80mを測る。深さは最深で2.30mを測る。埋土は上層が黒褐色粘土や明赤褐色ロームを主体として凸レンズ状に堆

雨城区交警

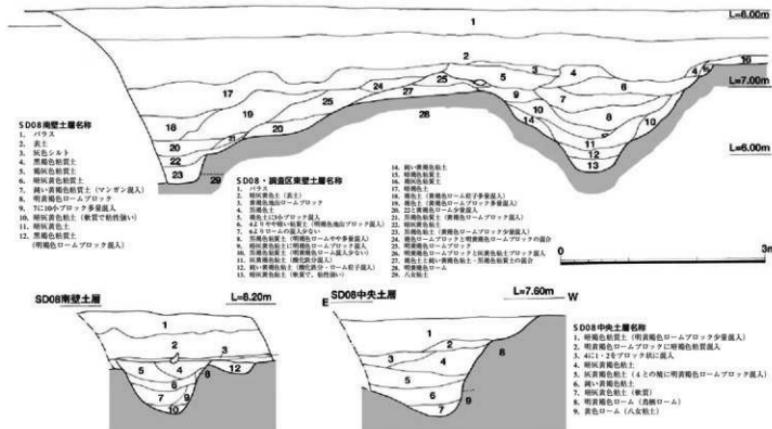


Fig. 14 調査区東壁、SD08土層(1/60)

積し、下層は地山口ニムブロックを多く含み、また粘性も強くなり、漂木がある。

出土遺物 (Fig.20・22・33, PL.15) 弥生土器、古墳時代～古代の土師器・須恵器、中世土師器・輸入陶磁器、瓦などが出土している。上層～最下層まで大抵の層で遺物を報告する。

76 - 79は上層出土。76は越州窯系青磁碗。I a類の蛇の目高台底部1/7片で、底径7.7cmを測る。オリーブ灰色釉がかかるが、高台疊付きは無釉である。重ね焼きの痕跡が底部に残る。77 - 83は白磁。77・79は碗口縁部細片。77はII類の玉縁、78・79はVI類。79は1/8片で復元口径18.0cmを測る。焼成や不良で、半透明の黄褐色の釉がかかる。外面部全体は露胎。80はV類小碗か高台付皿の口縁部1/2片で、復元口径14.0cmを測る。灰白色の透明釉が全体にかかる。内面沈線が巡る。81はIV類の底部。底径6.3cmを測る。内面に半透明の灰白色釉がかかるが、外面は露胎。胎土・焼成は良好。82はII類の高台付皿1/5片。復元口径13.9cm、器高3.9cmを測る。オリーブ灰色の透明釉がかかるが、高台は露胎で、見込みは蛇の目状に釉ハギする。83 - 85は中国產陶器。83は壺底部1/8片。復元口径8.3cmを測る。無釉で色調は灰黄褐色を呈す。胎土は精良、焼成は良好。84は褐釉水注の把手の部分。ヘラ状工具による刻目が付く。85は鉢の底部1/8片。復元底径9.2cmを測る。薄い赤褐色の半透明釉がかかる。胎土・焼成は良好。86 - 88は土師器小皿。1/7片・1/4・1/4片の破片で、復元口径は8.6cm・9.3cm・9.0cm、器高は1.1cm・1.3cm・1.3cmを測る。いずれもやや摩滅するが、体部の調整は回転ナデ。底部は86・87はヘラ切り。89は東播系の須恵器の片口鉢口縁部1/16片。復元口径約30cmを測る。調整は回転ナデ。色調は黒から灰白色を呈し、胎土は細砂を含む。焼成は良好。90 - 92は中層。90は龍泉窯系青磁碗1/12片。復元口径15.6cmを測る。内面はヘラによる花文が入る。内外面オリーブ灰色釉がかかる。胎土・焼成は良好。91は陶器の鉢。口縁部1/8片で、復元口径26.4cmを測る。無釉で色調は灰褐色を呈す。胎土は3mm内の粗粒沙を多く含み、焼成は良好。92は

土器器の坏1/5片。復元口径13.9cm、器高は2.3cmを測る。外底部はヘラ切り、体部は回転ナデ。

93~107は下層・最下層出土。93は龍泉窯系青磁平底皿I類。ほぼ完形で、口径は9.4cm、器高1.9cmを測る。見込みに模様に入る花文が入る。明オリーブ灰色釉がかかるが、外底部は釉を搔き取る。胎土・焼成は良好。

94はVI類の白磁碗。1/11片で、復元口径

17.6cmを測る。灰白色の透明釉がかかる。

胎土・焼成は良好。95~96は中国産陶器。95は褐釉水注の口縁部1/4片。復元口径9.0cmを測る。極暗赤褐色釉が内外面にかかる。胎土・焼成は良好。96は陶器捏鉢底部1/5片。復元底径16.0cmを測る。無釉で内面は使用により摩滅する。外面は回転ナデ。胎土に最大3mmの粗砂粒を含む。焼成は良好。97~101は土器。97・98は土器小皿。いずれもほぼ完形で、口径8.8cm・9.6cm、器高1.1cm・1.3cmを測る。調整は体部から97は内面が回転ナデとナデ、98は摩滅し不明。底部は回転系切りで、板状圧痕が残る。色調は橙色を呈し、胎土は97は赤色粒子などを僅かに含み、98は精良。焼成はいずれも良好。99~101は壺。1/5片・完形・口縁2/3片で、口径は復元14.0cm・13.1cm・13.1cm、器高は2.2cm・2.4cm・2.8cmを測る。調整はいずれも体部は回転ナデ、内底部は100・101は回転ナデ後ナデ、外底部は100・101はヘラ切りである。102~107は須恵器。102・103は壺底部1/2片・1/4片で、復元底径9.4cm・9.1cmを測る。調整は体部から内底は回転ナデからナデ、高台から外底部はヘラ切りとケズリ。色調はいずれも灰色で、胎土は102は精良、103は細砂粒を少量含み、焼成は良好。8世紀代のもの。104は壺の底部か。1/6片で、復元底径11.6cmを測る。調整は体部回転ナデ、内面ナデ、高台は貼付けヨコナデ、外底部は回転ケズリ。色調は黄灰色から純い橙色を呈し、胎土は細砂粒をやや多く混入し、焼成は良好。105は蓋1/7片で、復元口径15.6cm、器高2.1cmを測る。調整は体部から内面は回転ナデ、天井部はケズリ。106は壺蓋1/4片で、復元口径11.6cmを測る。調整は口縁部回転ナデ、天井部外面は回転ケズリ、内面はナデ。胎土は精良、焼成は良好。107は小壺などの底部か。底部径6.9cmを測る。調整は外底部手持ちケズリ、体部は回転ナデ、内面はナデ。

S3は楕円形の全面磨られた丸石で、上面に一筋細いV字形の刻目がある。井戸最も下層出土で祭祀品か。S4は砥石片で最大長7.3cm、最大幅5.1cmを測る。上下、左右側面が使用面である。石材は砂岩。下層出土。S5は滑石製品の一部。残存長15.9cm、残存幅10.2cm、厚さ1.5cm程度である。上下両面ケズリ加工を加えているが、ススが付着しており、煮炊具の一部か。

M4は鋸がひどい、断面長方形の棒状の鉄製品。残存長6.9cm、幅1.5cmを測る。

SE53 (Fig.18, PL.10)

調査区西壁にかかる円形の素掘り井戸。境界にかかり完掘していない。直径1.2mで、深さ2.2m以上を測る。埋土は暗褐色粘土と地山ロームブロックの混合土で、埋め立てられた状況を示す。

出土遺物 (Fig.21) 古代から中世の土器、中国産白磁などが少量出土している。

108は中国産白磁でVI類の白磁碗。口縁部1/12片で、復元口径17.0cmを測る。灰白色の透明釉がかかり、表面には大きく氷裂が入る。胎土は精良、焼成は良好。

SE66 (Fig.19, PL.9)

調査区西壁中央部で検出した大型の円形井戸で、当初は土坑として考え掘り下げたが、壁が直であ

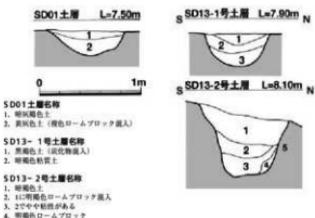


Fig. 15 SD01・13土層 (1/40)

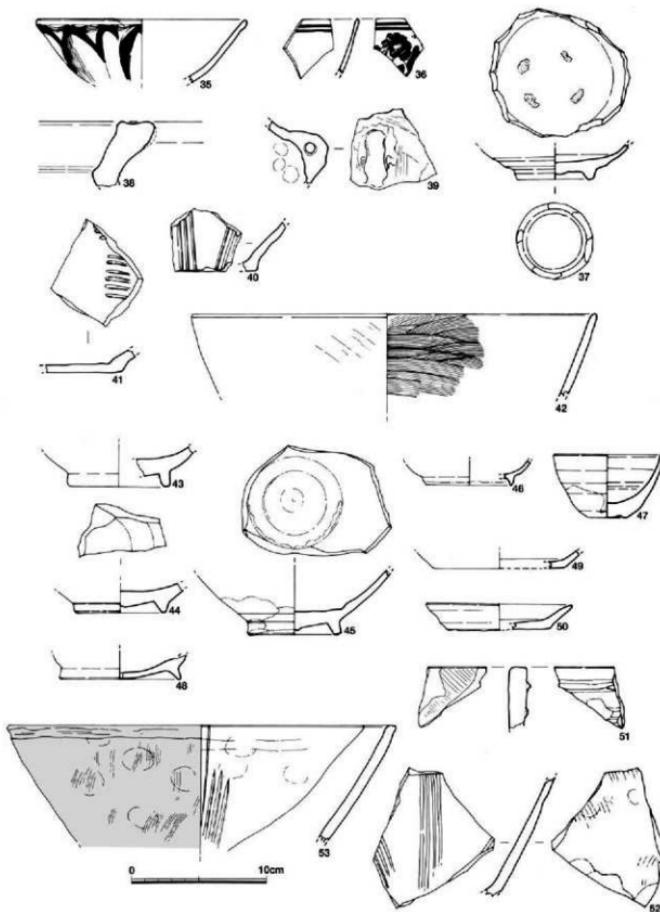


Fig. 16 SD08-①出土土器 (1/3)

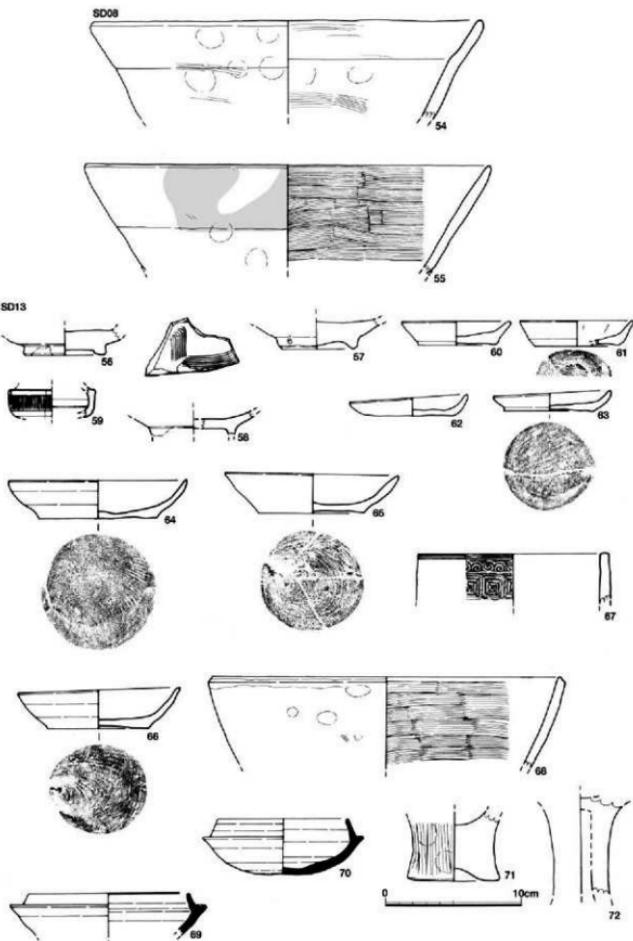


Fig. 17 SD08-②·13出土器 (1/3)

り、また1.5mを超える深さで、そして遺構の時期が出土遺物から近世であったので、調査期間の関係から、完掘を断念して、1/4程を部分的に掘り下げる断面観察したところ、井筒と思われる落込みを確認したので、井戸と考えた。規模は上面で3.2m、深さは最深部で2.4mを測る。埋土は上層が鳥栖ロームブロック、下層は八女粘土で暗灰黄色粘土ブロックを混入した土であり、人為的に埋め立てた状況を呈す。下層の井筒部は明黄褐色砂質ロームと黒褐色粘土の混合土となり、その外側は黄褐色の砂質ロームである。湧水はなかった。

出土遺物（Fig.21, PL.15・16）古墳時代の竪穴住居跡を切って掘り込んでいるためか、古墳時代土師器、須恵器や古代瓦と中世の輸入陶磁器、近世の国産陶磁器、日常雑器などが出土している。

109は肥前系と思われる陶器小碗。底径3.3cmを測る。高台部ケズリ出しで露胎。体部は灰白色透明釉がかかる。胎土精良、焼成は良好。110～114は染付。110は肥前器の一輪差しの底部1/4片。復元底径4.5cmを測る。外面には灰白色の半透明釉と染付文様が入るが、内面と高台は露胎。焼成はやや不良。111・112は肥前系の瓶の底部。1/3片・3/4片で底径は5.0cm・4.4cmを測る。外面灰白色の透明釉がかかり、内面と高台墨付きは露胎。112の体部外面は呂の文字文様がある。113は肥前系の皿。1/3片で、復元底径14.0cm。器高3.8cmを測る。灰白色の透明釉がかかり、外面唐草、体部内面は花文が入る。厚手である。114は肥前系鉄絵陶器丸碗1/3片。復元口径8.9cm。器高5.4cmを測る。外面笠の文様が入る。下地に化粧土を加え、灰白色の透明釉を加える。115は近世の土師器皿。1/4片で、復元口径11.8cmを測る。体部調整は回転ナデ、外底部はヘラ切り、外面にススが付着する。116は土師質土器大鍋1/8片で、復元口径49.0cmを測る。調整は外面ハケ目、内面ナデで外面にススが付着する。色調は純い褐色から黒色を呈し、胎土は粗砂・金雲母微粒を多く含む。焼成は良好。

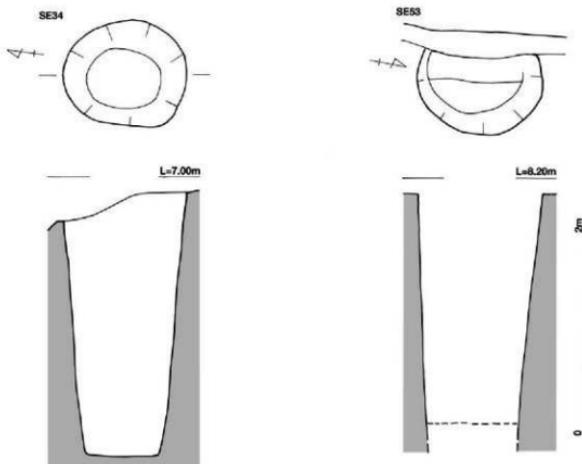


Fig. 18 SE34・53 (1/40)

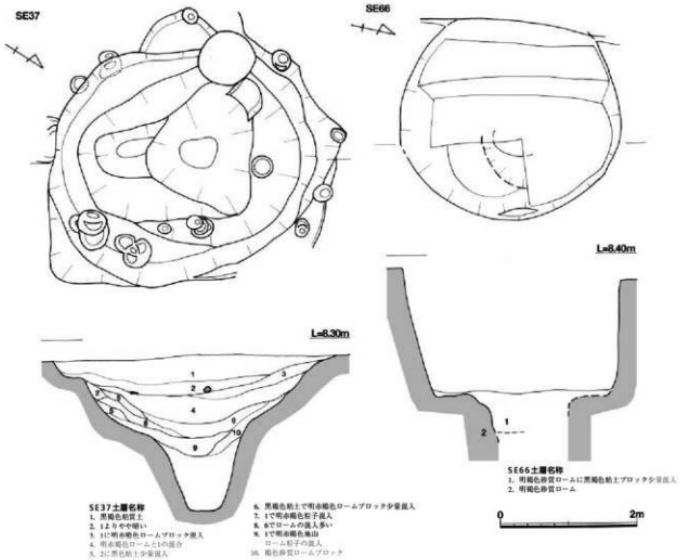


Fig. 19 SE37・66 (1/60)

117～130は弥生時代後期～古墳時代後期遺物。117は弥生時代後期の小型櫛口縁～胴部1/4片で、復元口径12.0cmを測る。調整は胴部外面から口縁部内面まで粗いハケ目、胴内面はナデ。色調は橙色を呈し、黒斑がある。胎土は1mm砂粒をわずかに含む。焼成は良好。118は土師器の裏の口縁から胴部1/8片で、復元口径17.0cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、胴部は外面平行タタキ、内面ナデで同心円状の当て具痕が残る。色調は橙色から灰褐色を呈し、胎土は2mm内砂粒を少量含み、焼成は良好。119～127は須恵器。119～121は坏蓋。119は摘みと口縁部にカエシが付く形態、1/2片で、復元口径9.5cmを測る。天井部外面は回転ケズリ、摘みと口縁部から内面は回転ナデ。色調は明褐色を呈し、胎土は精良、焼成は良好。120は1/5片で、復元口径14.0cm、器高4.05cmを測る。調整は120・121いずれも天井部回転ケズリ、口縁部から内面は回転ナデ。121は1/4片で、復元口径12.8cm、器高3.8cmを測る。天井部にはヘラ記号がある。120の天井部内面はナデ。色調はいずれも灰色で、胎土は1mm内細砂を少量含み、焼成は良好。122・123は坏身。1/3片・1/2弱片で、復元口径は11.4cm・11.0cm、器高5.0cm・3.5cmを測る。調整は外底部回転ケズリ、口縁部から内面は回転ナデ、内底部はナデ。122の外底部にはヘラ記号がある。123の受け部下には粘土塊が付着する。色調はいずれも灰色、胎土は精良、焼成は良好。124は平瓶などの口縁部で、歪みが大きく復元口径は10cmを測る。調整は外面カキ目と回転ナデ。色調は暗灰色を呈し、胎土・焼成は良好。125は壺1/2片。復元口径9.8cmを測る。調整は回転ナデ。色調は灰色を呈し、胎土は1mm内砂粒をわずかに含み、焼成

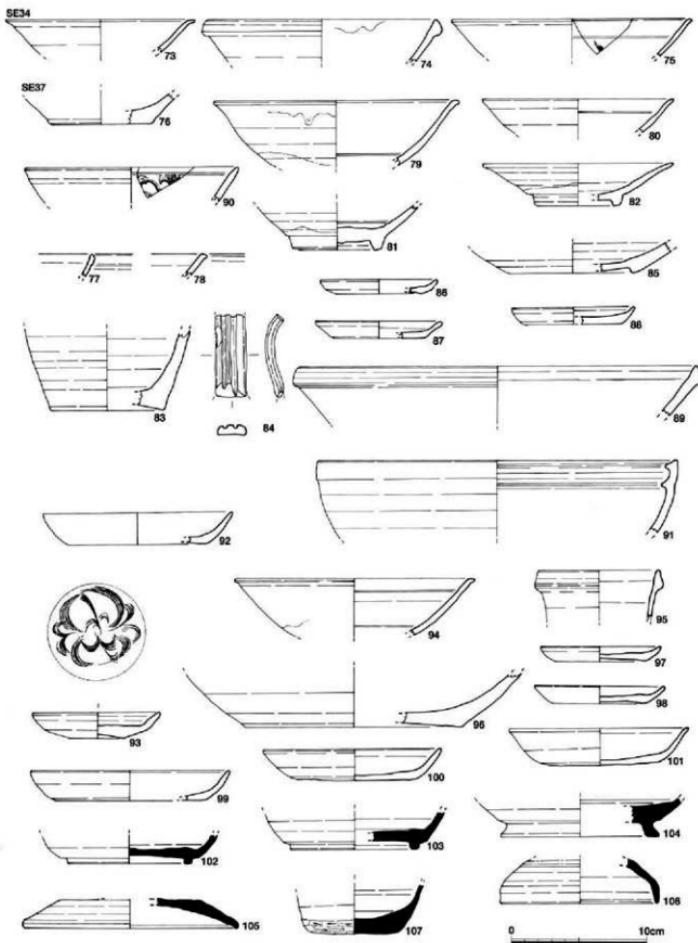


Fig. 20 SE34・37出土遺物 (1/3)

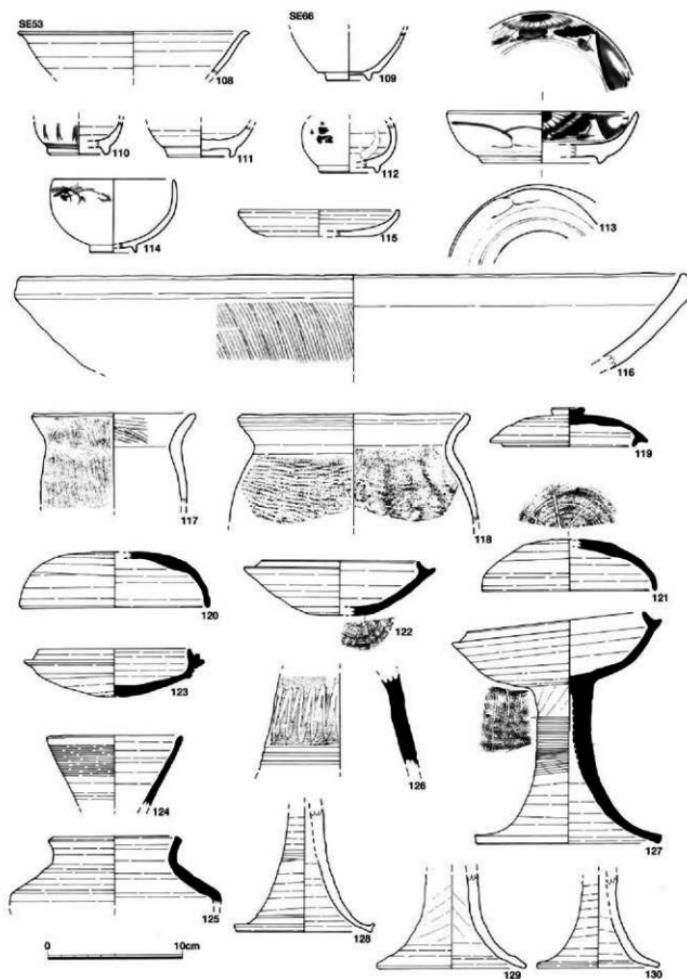


Fig. 21 SE53・66出土遺物 (1/3)

は良好。126は器台脚部1/5片で、長方形の透かし孔があり、下端には2条の沈線、外面カキ目で強く深い櫛描波状文があり、内面回転ナデ。色調は灰色を呈し、胎土・焼成は良好。127は有蓋高坏1/2片で、歪みがあり復元口径12.9cm、最大高16.7cmを測る。坏部外底は回転ケズリ、口縁部から内面は回転ナデ、脚部は回転ナデで、中央部にカキ目を加える。色調は灰色、胎土は精良、焼成は良好。128～130は土師器高坏脚部。128は1/4片で、復元口径10.3cmを測る。調整は回転ナデ。須恵器の成形による土師器。129は3/4片で、底径11.0cmを測る。調整はヨコナデで、シボリ痕が残る。130は底径9.1cmを測る。調整は回転ナデ。色調は淡橙色・淡黄橙色・橙色を呈す。胎土は128・129は細砂粒・赤褐色粒子を微量含み、130は2mm内砂粒を多く含む。焼成はいずれも良好。

⑤ 土坑 (SK)

SK05 (Fig.23, PL.10)

調査区中央北側で検出したSD13を切る方形の土坑。規模は長軸長2.50m、短軸長2.22m、最大深さ1.42mを測る。底面はほぼ平坦を呈す。南側には幅の狭いステップ状の段が2段付く。壁面は直または一部オーバーハングする。埋土は暗褐色土と黒色粘質土の混合で地山ロームブロックを含むが、底面は綿まらない。形態から地下式壙か。

出土遺物 (Fig.26, PL.16) 弥生土器・古墳時代～古代土師器・須恵器・中世土師器・輸入陶磁器などが出土しているが、近世の遺物も混入している。

131は白磁皿。16世紀の端反りの皿。1/3片で、復元口径12.2cm、器高は2.7cmを測る。乳白色釉が厚めにかかるが、置付きは露胎、胎土精良、焼成は良好。132は白磁碗IV類の底部。復元底径7.1cmを測る。底部はケズリ出しで、見込みには灰白色釉がかかる。胎土精良、焼成は良好。133は須恵器坏蓋。天井部には刺突文が付く。調整はヨコナデ。

SK06 (Fig.23, PL.10)

調査区中央北側で検出したSD13を切る平面形が隅丸方形を呈す大型土坑。埋設管で西側が切られ、一部崩落してはいるが、規模は長軸長2.80m、短軸長1.80m、深さ1.43mを測る。壁面はややオーバーハングし、上部は窄まるものと思われる。南側にはステップ状の段が2段付く。底面はほぼ平坦で花崗岩を主体とする一部焼け石を含む礫石が密着して出土している。形態から地下式壙と思われる。

出土遺物は古代～中世の土師器、白磁や近世の瓦細片などが図示出来ないが少量出土している。

SK09 (Fig.24)

調査区北壁沿い斜面で検出した長方形土坑。確認規模は長軸長1.20m、短軸長0.75m、深さは0.5mを測る。底面は南壁沿いにテラスを持つ。埋土は暗褐色粘質土で、黄褐色地山ロームブロックを混入する。壁断面は逆台形を呈す。出土遺物は古墳時代～古代の土師器・須恵器、古代の瓦、中世土師器、白磁などが少量出土。細片で図示出来ない。

SK10 (Fig.23, PL.10)

調査区東側で検出した方形土坑。規模は長軸長2.22m、短軸長2.20m、最大深さ0.8mを測る。底壁面はほぼ直立し、南側にステップ状の半月状の張り出しがある。底面はほぼ平坦で、礫石が密着して検出された。礫石は玄武岩や砂岩の割石が多く焼けている。また2か所直径0.25m、深さ2～5cmの浅いビットがある。埋土は黒褐色粘質土と鈍い黄褐色粘質土を主体とし、底面は黒褐色粘質土で、地山ロームブロックや黒色粘土を少量混入する。残りは悪いが地下式壙と思われる。

出土遺物 (Fig.26, PL.17) 古墳時代須恵器、中世土師器、瓦器、輸入陶磁器などが少量出土。

134は小野C類の明青花碗1/7片で、復元口径14.8cm、器高5.9cmを測る。外面は口縁部と高台に3

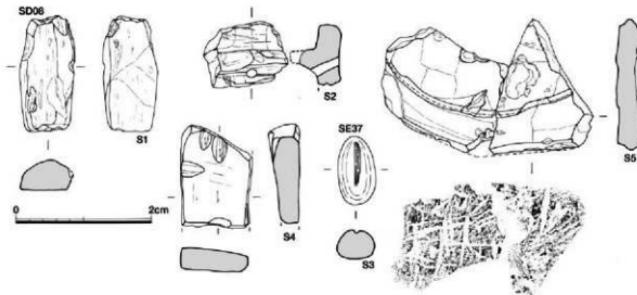


Fig. 22 各遺構出土石製品① (1/3)

条の界線、丸を三つ結合した文様で、見込みにも同様の文様がある。胎土に黒色粒子を含む。焼成は良好。S7は板碑など供養塔の一部。残存長14.5cm、幅17.0cm、厚さ7.3cmを測る。表面は丁寧な研磨、側面、裏面は雑な仕上げで、タガネなどの工具痕が残る。石材は砂岩で焼けている。

SK11 (Fig.23, PL.10)

調査区東側で検出した隅丸長方形土坑。長軸長2.15m、短軸長1.75m、最大深さ1.15mを測る。壁面はほぼ直に近いが、土層断面では僅かにオーバーハング状の壁の立ち上がりが確認出来た。底面はほぼ平坦で、礫石が密着して検出された。石は花崗岩の他に砂岩があり、一部焼石がある。埋土は黒褐色土・暗褐色土で、下層ほど粘質が強く、明黄褐色地山口ーム粘土ブロックを混入する。他の土坑に見られるステップは見られないが、地下式壙であろうか。

出土遺物 (Fig.26, PL.17) 古代の土師器、中世の土師器、瓦質土器、瓦器、輸入陶磁器、墓石片などが出土している。

135はVI類と思われる白磁底部。見込みに櫛描文が入る。高台と上部まで灰白色釉がかかる。胎土は灰白色で、精良、黒色粒子を含む。焼成は良好。136は土師器小皿。1/2片で、復元口径9.9cm、器高3.0cmを測る。器表面は摩減、調整は不明。色調は橙色を呈し、胎土は3mm内砂粒を含む。焼成は良好。137は片口の擂鉢。1/3片で復元口径は29.5cm、器高13.7cmを測る。内面4条のスリ目があり、使用により底面まで摩減している。外表面はナデ調整で、指押さえや下半にはハケ目が残る。色調は鈍い黄橙色を呈し、胎土は1mm内砂粒をわずかに含み、焼成は良好。

SK14 (Fig.25, PL.11)

調査区北側で検出したSD13を切る円形状の土坑で、底面は方形プランになる。規模は長軸長2.05m、短軸長1.70m、深さ1.65mを測る。壁面は崩落部分もあるが、直立又はややオーバーハングする。底面はほぼ平坦で、床より0.3m程浮いた所で、礫石が検出されている。埋土は黒褐色土に暗褐色土・橙色ロームブロックを混入土が主体で、礫石の上面では褐色砂質ロームブロック、礫石下は黒褐色粘質土となる。南側にステップ状の段が2段付く。地下式壙であろうか。

出土遺物 (Fig.26, PL.17) 古墳時代～古代の土師器・須恵器、古代の平瓦、中世の土師器、輸入磁器、陶器、平瓦などが出土している。

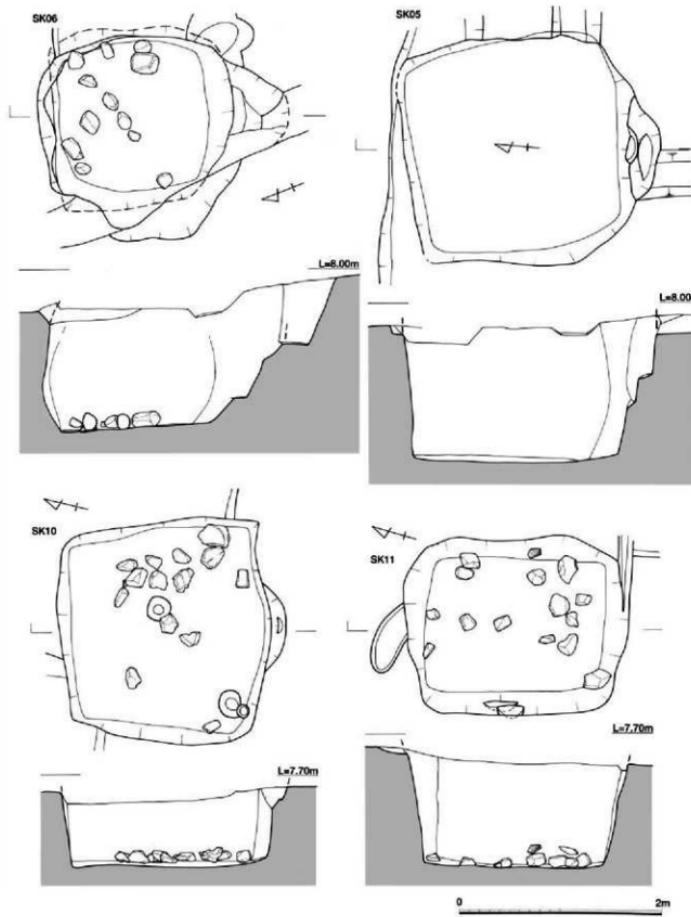


Fig. 23 SK05 · 06 · 10 · 11 (1/40)

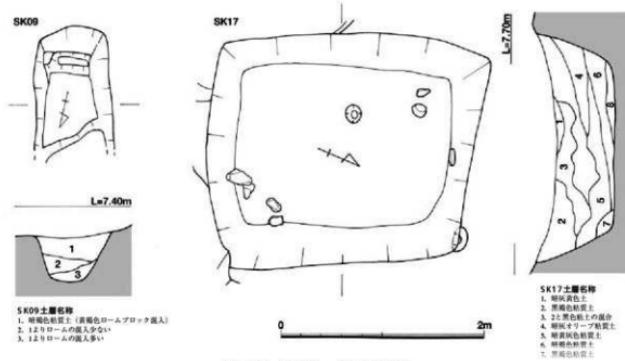


Fig. 24 SK09・17 (1/40)

138は白磁。平底の皿で底径3.2cmを測る。見込みは段が付く。不透明の乳白色釉がかかるが、外底はケズリで釉はぎする。胎土は精良、焼成良好。

SK17 (Fig.24,PL.11) 調査区中央南側で検出した、長方形の大型土坑。規模は長軸長2.63m、短軸長2.25m、深さ0.75mを測る。底面はほぼ平坦で、両側に部分的に礫石や陶器が出土している。埋土は暗灰黃褐色粘質土、地山ロームブロックで、下層は灰味を帯び、粘性が強い。壁面の立ち上がりは緩やかである。底面はほぼ平坦で、隅側に礫石が出土している。半地下式倉庫か。

出土遺物 (Fig.26,PL.17) 古墳時代の土師器・須恵器、中世～近世の土師器、須恵器、陶器などが少量出土している。

139は肥前磁器の薺麦猪口1/4片。復元口径7.6cm、器高5.2cmを測る。体外面桐花文がある。140は肥前陶器。碗で復元口径10.4cm、器高5.2cmを測る。オリーブ黒色釉の上に白いハケ目文様をえがき、疊付きは釉をかき取る。17世紀末～18世紀前半の現川窯のもの。141は備前陶器の底部。底径8.5cmを測る。底部は無釉で回転糸切り。脚部から内面は水浸した備前焼の土を水で溶かして塗り、乾燥させ、そこに鉄釉を重ね塗りし、更に自然釉がかかる。内面にも釉がかかる鉢のような形態か。

SK36出土遺物 (Fig.26)

SE37東側で検出した長方形状の土坑。規模は長軸長1.5m以上、短軸長1.20m、最大深0.32mを測る。埋土は黒色粘質土。142は須恵器高環脚部。中央に二条の沈線が巡る。調整は回転ナデ。色調は緑黒色を呈し、胎土は2mm内砂粒を含み、焼成は良好。

SK48 (Fig.25,PL.11)

調査区北西隅で検出した丸角長方形の土坑。規模は長軸長2.48m、短軸長1.87m、深さ1.10mを測る。底面はほぼ平坦で、壁面は直立またはやや内傾する。埋土は暗灰黃褐色土で、黄褐色ロームブロックを混入し、下層には黒色粘質土を含む。

出土遺物 (Fig.26,PL.17) 古代から中世の遺物を少量含む。土師器・須恵器、白磁、古代瓦などがある。近代の遺物も上層に含むが混入品である。

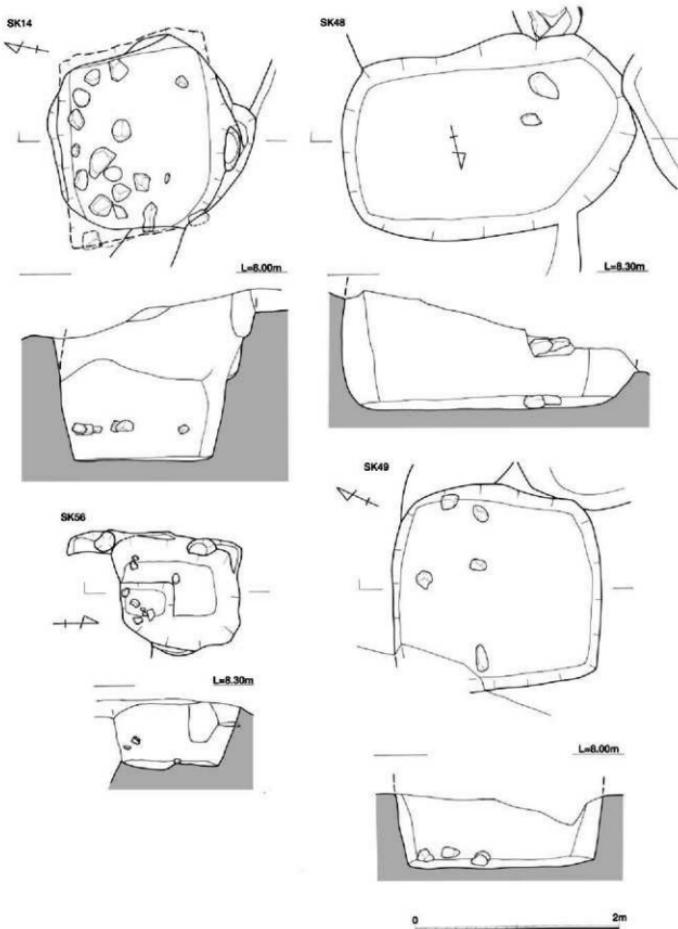


Fig. 25 SK14・48・49・56 (1/40)

143は須恵器櫛口縁部17片。復元口径20.0cmを測る。口縁部は回転ナデ、体部は外面格子目タタキ後力キム、内面は同心円状の當て具痕が残る。

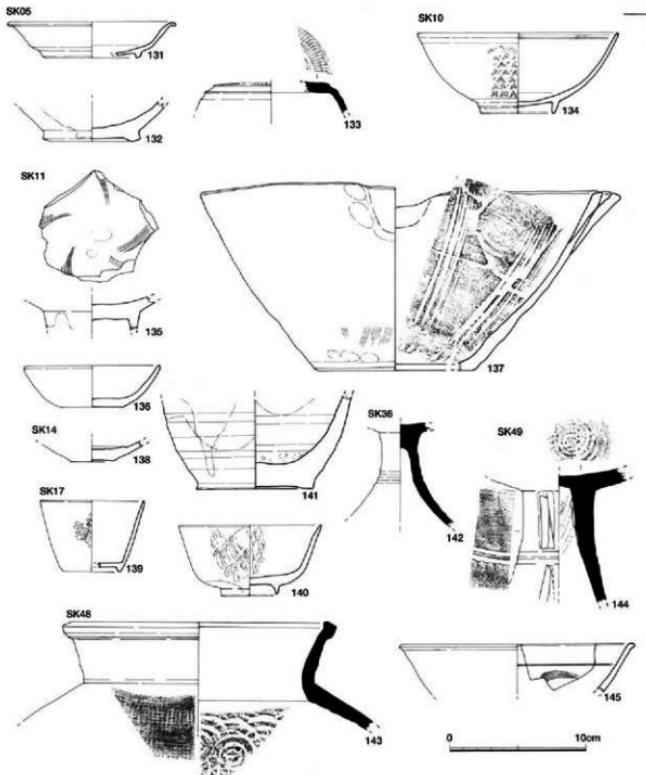


Fig. 26 SK05・10・11・14・17・36・48・49出土遺物 (1/3)

SK49 (Fig.25, PL.11)

一部が西壁にかかる方形土坑。上面は近世以降の擾乱を受け、確認規模は 2.03×1.98 m、深さは0.72mを測る。底面は平坦を呈し、壁はほぼ直立する。底面には密着する礫石がある。埋土は暗褐色土から暗灰黃褐色土である。

出土遺物 (Fig.26) 古墳時代～古代の土師器・須恵器、中世土師器、土師質土器、瓦質土器、輪入陶磁器などが少量出土している。

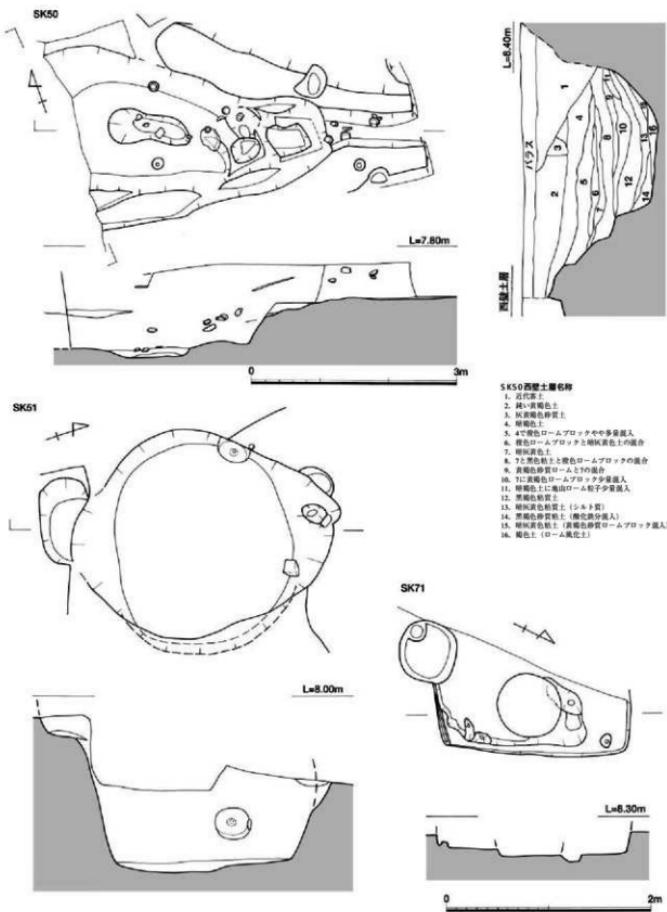


Fig. 27 SK50・51・71 (1/60・1/40)

144は須恵器高坏脚部で2段の長方形の透かし孔が空く。外面二重の沈線で区切られ上段カキ目と下段波状文が入る。内面は回転ナデで、奥にはシボリ痕が残る。坏部内面には同心円の当て具痕が残

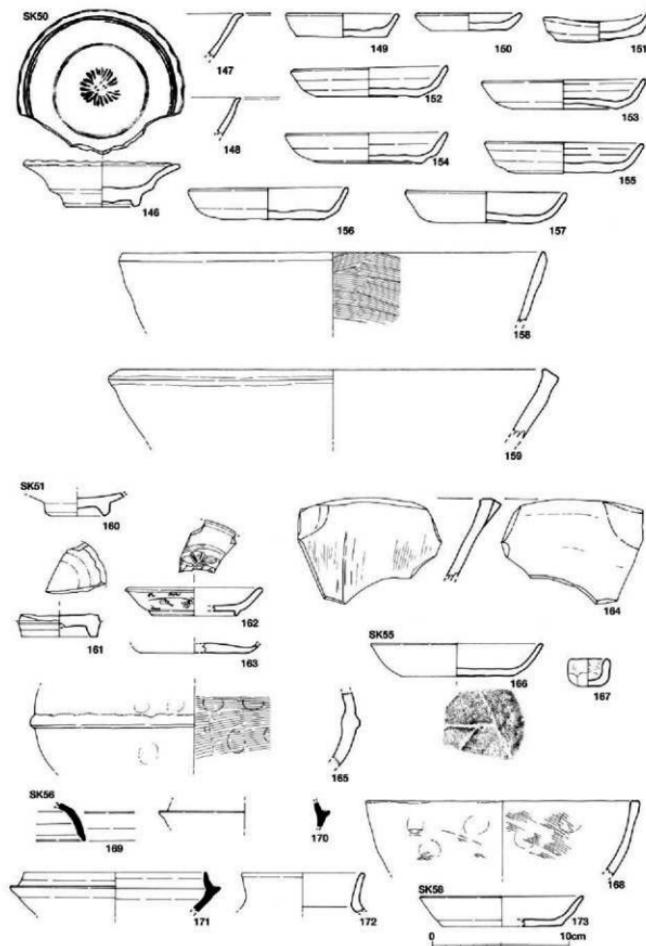


Fig. 28 SK50・51・55・56・58出土遺物 (1/3)

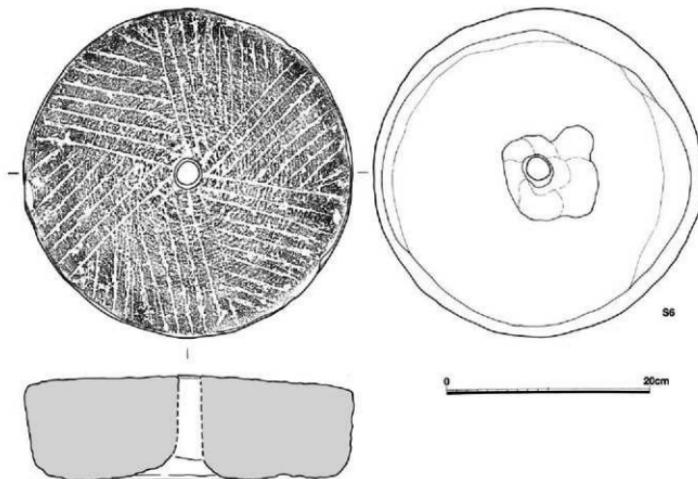


Fig. 29 SK51出土挽き臼 (1/4)

る。色調は灰色を呈し、胎土に1mm内砂粒を少量含み、焼成は良好。145は白磁VI類碗1/8片。復元口径17.6cmを測る。内面櫛描文様が入る。色調は灰白色の透明釉がかかる。胎土は精良、焼成は良好。

SK50 (Fig.27, PL.12)

調査区北西隅斜面で検出した西側が幅が広がる土坑。SD13を切る土坑で、一部が西壁にかかり全容は不明。確認規模は最大長4m、最大幅2.7m、最大幅1.35mを測る。底面は若干西側が低くなり、中央部が窪む。埋土は上層が暗褐色土で暗灰黃褐色土を混入し、下層は黒褐色粘質土、暗灰黃色粘土が主体となる。

出土遺物 (Fig.28, PL.17) 古墳時代・古代土師器・須恵器、古代瓦、中世土師器、輸入磁器、瓦器、土師質土器、瓦質土器などが出土している。

146は口縁が輪花状の青磁皿3/4片。復元口径11.5cm、器高3.4cmを測る。全面オリーブ灰色釉が厚めにかかり、疊付きには、焼成時の白色粘土が一部付着する。内面には印花が入る。147・148は白磁口縁部細片。147はVI類の細片、いずれも胎土・焼成は良好。149～156は土師器。149～151は小皿。149・151はほぼ完形、150は1/2片で、口径・器高は8.3cm・1.8cm、7.8cm・1.3cm、8.0cm・2.4cmを測る。151は歪みが大きい。調整は器表面が摩滅するが、回転ナデ。外底部は150・151は回転糸切り、151は板状圧痕が残る。色調はいずれも浅黄橙色を呈し、胎土は149は2mm内粗砂を含む。150・151は精良。焼成は良好。150はススが付着する。152～157は壺。いずれも1/2以上残り、口径・器高は11.5cm・2.3cm、12.1cm・2.3cm、11.0cm・2.3cm、11.7cm・2.3cm、11.8cm・

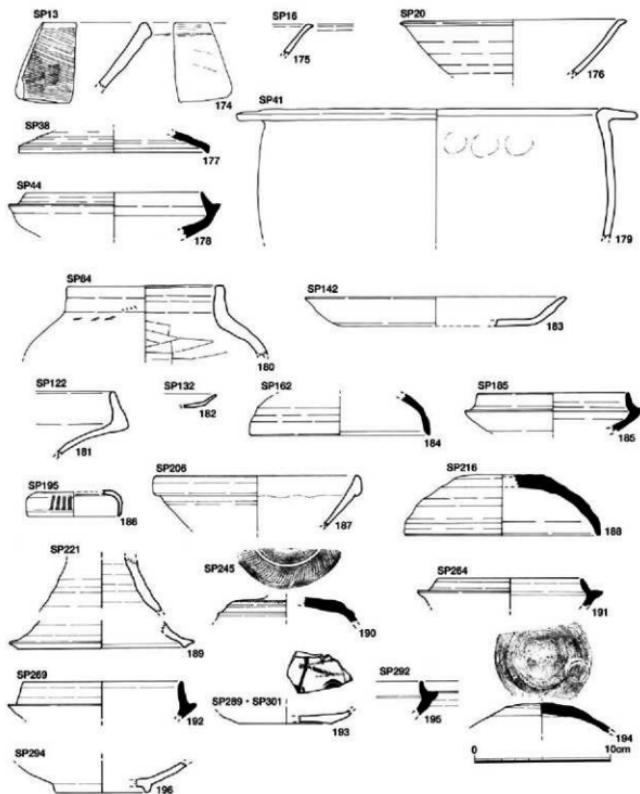


Fig. 30 ピット・柱穴出土遺物 (1/3)

2.4cm、11.8cm・2.4cmを測る。調整は回転ナデ、底部は回転糸切り。色調は橙色又は純い橙色を呈し、胎土はいずれも2~3mm内粗砂を含む。焼成は154がやや不良。158・159は土師質土器。158は1/13片で、復元口径31.0cmを測る。調整は外面ナデ、内面ヨコハケ目。外面にはススが付着する。色調は純い赤褐色を呈し、胎土は2mm内粗砂を多く含み、焼成は良好。159は片口の鉢の1/4片。復元口径33.0cmを測る。器表面は荒れが著しく、調整不明。色調は純い橙色を呈し、3mm内粗砂粒を多く含む。焼成は良好。

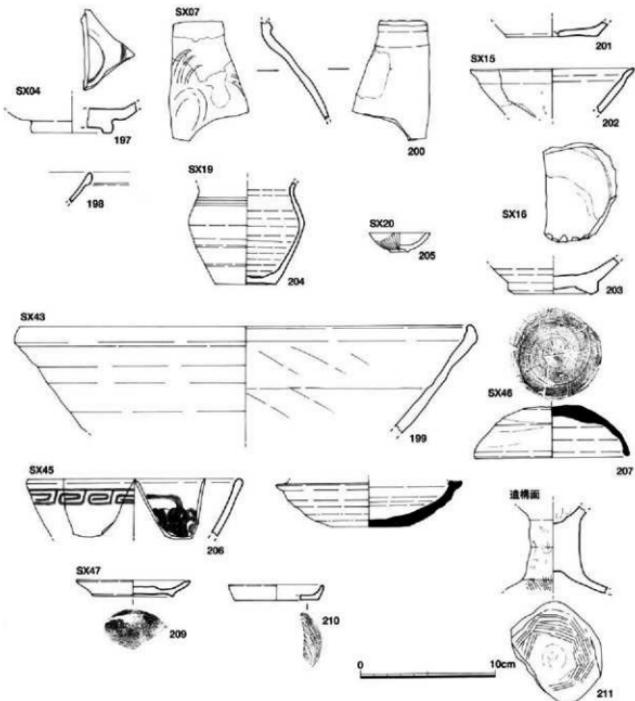


Fig. 31 その他の遺構・遺構面出土遺物 (1/3)

SK51 (Fig.27, PL.12)

調査区北西斜面で検出した橢円形状の土坑。西側を埋設管で切られる。規模は2.80m、2.03m、最大深さ1.53mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は両側がオーバーハングする。南側には壁面から高さ1.3m程の所に段がある。西側壁面に挽き臼が1個落込んでいた。埋土は上層が灰黄褐色土で黄褐色砂質ロームブロック混入、下層は黒色粘土と橙色ロームブロックの混入土。

出土遺物 (Fig.28・29・32・34, PL.17・18) 古墳時代 - 古代の土師器・須恵器、古代瓦、中世土師器。土師質土器、瓦質土器、瓦器、釉陶磁器などが少量出土している。

160・161は白磁碗底部。160は底径4.8cmを測る。高台疊付き内は露胎で、離れ砂が付着する。161は1/5片で、復元底径5.5cmを測る。高台部は露胎、見込みは釉がかかり、蛇の目状に釉を搔き取

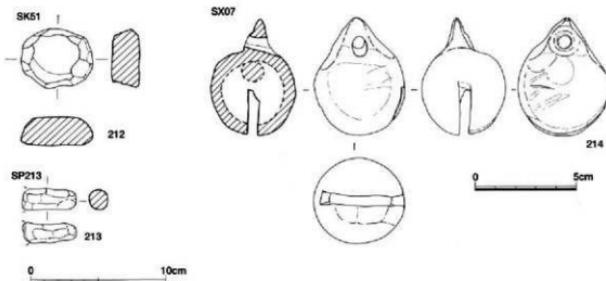


Fig. 32 各遺構出土製品 (1/3 · 1/2)

る。162は青花皿1/6片で、復元口径10.0cm、器高2.1cmを測る。全面に釉がかかり、外面唐草、内面花文が入る。高台内には砂粒が付着する。163は土師器皿底部1/4片。復元底径7.8cmを測る。器表面は摩滅し、調整は不明。色調は純い黄橙色を呈し、胎土は精良。焼成は不良。164は土師質土器の片口壺鉢口縁部。内面は使用でスリ目が摩滅する。色調は浅黄色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は不良。165は瓦質土器の湯釜全体1/3片。外面ナデ、内面ヨコハケ目で外面にはススが付着する。色調は純い黄橙色を呈し、胎土は精良、焼成は不良。212は土師質の瓦を再利用した楕円形の瓦玉。径4.3×5.3cm、厚み2.0cmを測る。縁辺は打ち欠き、色調は橙色を呈し、胎土は精良、焼成は普通。56は挽き臼。円形で中央部が高くなる形態。直径は32.0cm、高さ10.2cm、中心の芯棒孔径2.2cmを測る。使用面は6区画で幅1.2~1.5cm間隔で9条の細い条溝がある。溝は使用により磨り減る。側面・底面は敲打後、誰なスリ調整。底面中央の芯棒孔周囲には孔を開ける時に打ち欠いた剥離面が広がる。石

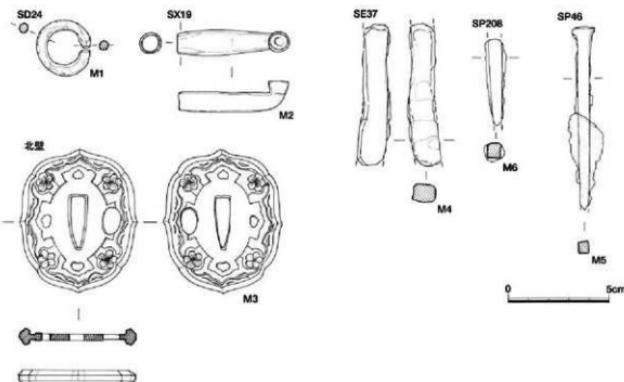


Fig. 33 各遺構出土金属製品 (1/2)

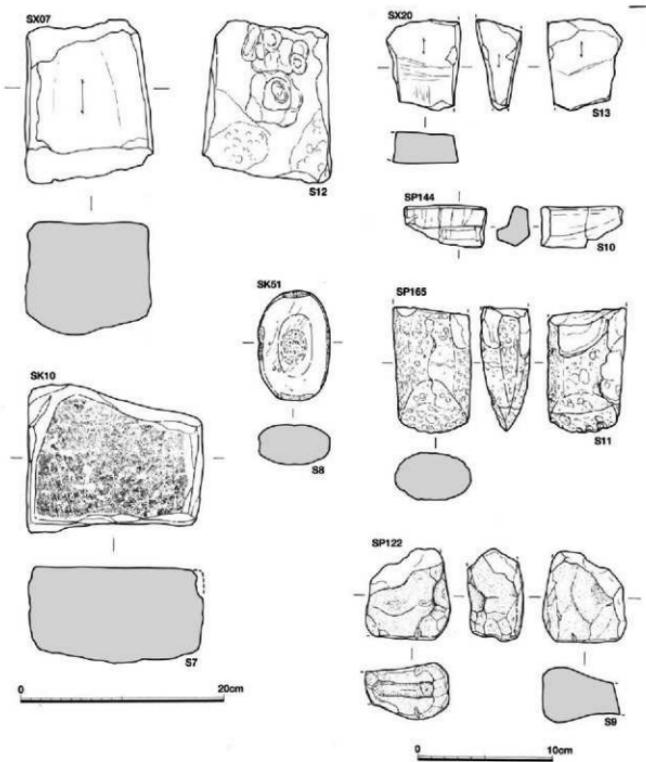


Fig. 34 各遺構出土石製品 (1/3)

材は阿蘇凝灰岩か。S8は石錐形を呈す磨石。全長8.1cm、最大幅5.3cm、厚さ2.9cmを測る。全面が磨られているが、上下両木口・側面に敲き使用痕が残る。

SK55出土遺物 (Fig.28) SK55はSE53に切られる浅い落込み。方形を呈す平面形のコーナーの一部である。埋土は黒褐色粘質土で、地山ロームブロックが混入する。166は土師器の坏1/3片。復元口径は12.6cm、器高2.4cmを測る。器壁は摩滅し調整は不明。外底部に板状圧痕が残る。色調は浅黄橙色を呈し、胎土は精良、焼成は不良。167は手捏のミニチュア器2/3片。復元口径3.0cm、器高2.0cmを測る。色調は褐灰色を呈し、胎土は精良、焼成は良好。168は土師質土器の鉢1/8片。復元口径20cmを測る。調整はハケ目後ナデ。色調は鈍い黄橙色を呈し、胎土は2mm内粗砂粒を多く含む。焼

成は良好。

SK56 (Fig.25, PL.13)

調査区中央で検出した方形土坑。南側を擾乱で切られる。規模は長軸長1.05m、短軸長1.15m、深さ0.70mを測る。埋土は黒褐色粘質土で、下層はロームブロックを多く含む。断面は逆台形を呈す。

出土遺物 (Fig.28) 古墳時代土師器・須恵器が出土している。

169~171は須恵器。169はIIIa期の坏蓋細片。口縁内面に段を有す。調整は回転ナデ。色調は灰色を呈し、胎土は細砂を含み、焼成は良好。170・171は坏身。170は受部細片。調整は回転ナデ。171は1/10片で、復元口径13.4cmを測る。調整は回転ナデ。色調は灰色を呈し、胎土は4mm粗砂を含む。焼成は良好。172は櫛口縁部1/4片。復元口径9.0cmを測る。調整は摩滅し不明。色調は鈍い橙色を呈し、焼成は不良。

SK58出土遺物 (Fig.28) 調査区やや西より中央で検出した方形の浅い土坑。埋土は黒褐色粘質土を呈す。173は土師器の坏1/4片で、復元口径12.0cm、器高2.1cmを測る。器表は摩滅し調整は不明。色調は橙色を呈し、胎土精良、焼成は不良。

SK71 (Fig.27, PL.11)

西壁にかかる方形土坑でSB75柱穴が切る。規模は南北長1.90m、東西長1.30m以上、深さ0.20mを測る。埋土は黒色粘質土で地山ロームブロック少量混入。底面は平坦で、北側が一段深くなる。

出土遺物は弥生時代中期頃のものを少量含む。図示出来るものはない。

⑥ 柱穴・ピット出土遺物 (SP) (Fig.30・33・34, PL.18)

174はSP13出土。擂鉢と思われる口縁部細片。調整は外面ナデ、内面ハケ目。色調は灰色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は良好。175はSP16出土。VI類の白磁碗口縁部細片。176はSP20柱芯出土。VI類の白磁碗口縁部1/7片で、復元口径16.6cmを測る。177はSP38出土。須恵器坏蓋1/10片で、復元口径14.0cmを測る。調整は回転ナデ、色調は暗オリーブ灰色を呈す。胎土は白色微粒子を含み、焼成は良好。178はSP44出土。IIIb期の須恵器坏身で、復元口径13.0cmを測る。調整は回転ナデ。色調は灰色を呈し、胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好。179はSP179出土。SP41出土。弥生土器櫛1/9片で、復元口径29.4cmを測る。器表は摩滅し、調整は不明。色調は浅黄橙色を呈し、胎土は砂粒を多く含み、焼成は不良。180はP84出土。瓦質土器湯釜口縁部1/4片、復元口径11.5cmを測る。調整は外面ハケ目後ナデ。胎土は微粒の金雲母・白色粒子を含む。焼成はやや不良。181はSP122出土。弥生時代後期後半の複合口縁細片。器表は摩滅し調整不明。色調は橙色を呈し、胎土は細砂を含み、焼成は普通。182はSP132出土。中世土師器小皿の細片。器表は摩滅し、調整不明。色調は淡黄橙色を呈し、胎土は赤色粒子を含み、焼成はやや不良。183はSP142出土。9世紀の土師器皿1/6片。復元口径19.2cmを測る。調整は回転ナデ、外底部はヘラ切り。色調は橙色を呈し、胎土は精良、焼成は普通。184はSP162出土。須恵器坏蓋1/8片。復元口径13.2cmを測る。調整は回転ナデ。色調は褐灰色を呈し、胎土は精良、焼成は良好。185はSP185出土。須恵器の坏身1/6片で、復元口径11.0cmを測る。調整は回転ナデ、色調は褐灰色を呈し、胎土は精良、焼成は良好。186はSP195出土。青白磁合子の蓋1/10片で、復元口径6.8cmを測る。色調は青みを帯びた灰白色釉がかかり、胎土は精良、焼成は良好。187はP206出土。白磁碗IV類の1/6片で、復元口径14.6cmを測る。黄白色釉がかかるが、外面ピンホールが入り、内面釉垂れする。胎土は精良、焼成は良好。188はSP216出土。須恵器坏蓋1/3片。復元口径14.3cmを測る。調整は口縁部回転ナデ、天井部は回転ケズリ、内面は不

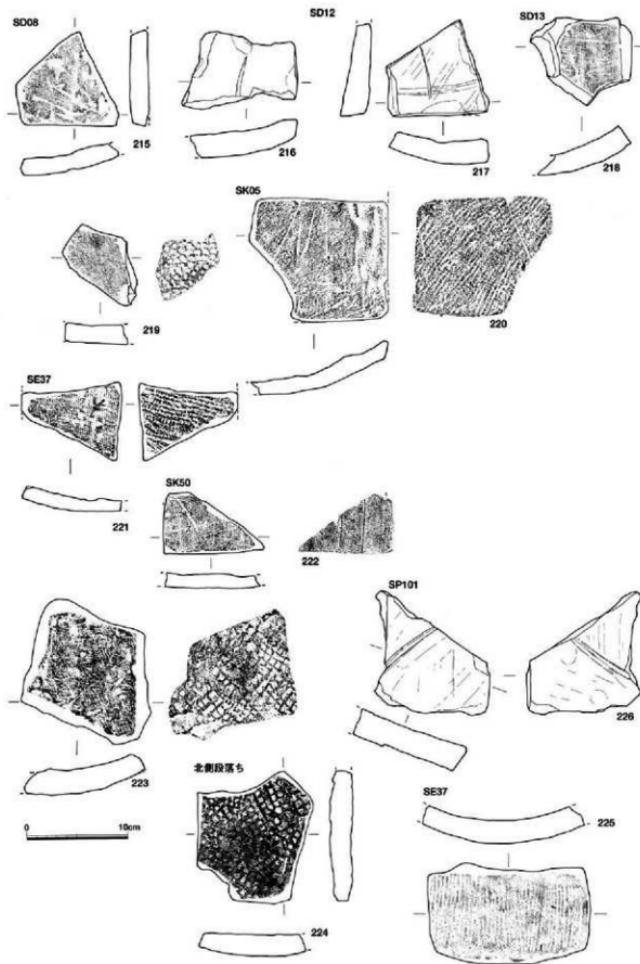


Fig. 35 各遺構出土瓦① (1/4)

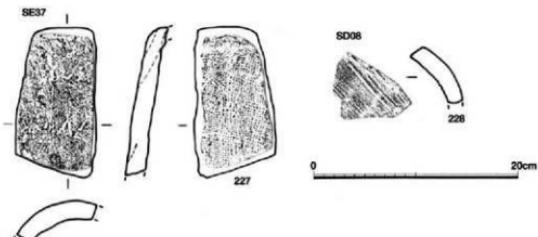


Fig. 36 各遺構出土瓦②(1/4)

整ナデ。色調はオリーブ黒色を呈し、胎土は精良、焼成は良好。189はSP221出土。土師器の高坏脚部1/4片。復元底径13.6cmを測る。調整は回転ナデ。色調は鈍い橙色、胎土は精良、焼成は良好。190はSP245出土。初期須恵器蓋1/3片。摘みの痕跡が残る。天井部には木口による刻目を時計回りで付けている。色調は褐灰色を呈し、胎土は精良、焼成は良好。191はSP264出土。須恵器坏身1/7片で、復元口径10.6cmを測る。調整は回転ナデ。色調は赤灰色を呈し、胎土は白色微粒子を少量含む。焼成は良好。192はSP269出土。IIIa期の須恵器坏身1/10片。復元口径11.7cmを測る。調整は回転ナデ。色調は褐灰色を呈し、胎土は白色粒子を含み、焼成は良好。193はSP289・SP301出土。同安窯系青磁の平底皿1/7片。復元底径6.8cmを測る。見込みにはヘラと櫛による文が入る。透明感のあるオリーブ灰色釉がかかるが、外底部は露胎。194・195はSP292出土。194は須恵器坏蓋天井部片。調整は天井部回転ケズリ、その他の回転ナデから内面はナデ。天井部には竹管による輪状の刻印がある。色調は褐灰色を呈し、胎土は1mm内砂粒を含み、焼成は良好。195は坏身細片。調整は回転ナデ。色調は褐灰色を呈し、胎土は精良、焼成は良好。196はSP294出土。土師器柄底部1/6片。底径6.8cmを測る。器表は摩滅し調整不明。色調は淡橙色を呈し、胎土は精良、焼成は良好。

S9はSP122出土。砥石片で残存長6.7cm、幅6.1cm、厚さ4.1cmを測る。上下、2側面に砥石使用痕が残る。石材は砂岩。S10はSP144出土。滑石製石鍋の口縁部を転用したもの。残存長6.0cmを測る。割れ口は磨っている。ススが付着。S11はSP165出土。磨製石斧の未製品の刃部片。残存長9.3cm、最大幅5.6cmを測る。全面敲打調整痕が残る。石材は玄武岩か。

M5はSP46出土の断面方形の鉄釘。全長9cm、幅0.5cmを測る。錆がひどく木質も残る。M6はSP208出土。釘の先端と思われる。全長4.3cm、直径は0.7cmを測る。全体に錆がひどい。

⑦ その他の遺構・遺構面出土遺物 (SX) (Fig.31~34, PL.18)

段落ち及び明確な遺構として確認出来なかった遺構出土遺物を報告する。

197・198はSX04出土で、SX43の上層。197は龍泉窯系青磁碗底部1/2片。内面はヘラによる文が入る。オリーブ灰釉がかかるが、高台内は露胎。198は小振りの玉縁口縁の白磁碗細片。199は下部SX43出土の東播系の須恵器の片口鉢か。1/10片で、復元口径33.2cmを測る。色調は褐灰色を呈し、胎土は3mm内粗砂を含み、焼成は良好。200・201・214・S12は北東隅段落ちSX07出土。200は陶器壺肩部細片。表面に褐色～鈍い黄橙色釉が薄くかかる。内面には當て具痕が残る。胎土は白色微粒子を若干含み、焼成は良好。201は土師器小皿の底部1/4片。器表は摩滅し調整は不明。外底部回転系切り。胎土は精良、焼成は良好。214は土鉢。球形の体部に紐を通す為の突起が付く形態。全長

5.7cm、体部は4.15×4.4cmを測る。球体には一文字の透かしが入り、内部に径約1cmの丸が入っている。調整はナデで工具痕が残る。色調は明橙色を呈し、胎土精良、焼成は良好。S12は大型の砥石片。残存長12.0cm、幅9.5cm、厚さ8.2cmを測る。上面と両側面は使用面。底面は軽い磨りと敲打で使用痕が残る。石材は花崗岩。202は浅い落込みS15出土の天目茶碗の口縁部1/7片。復元口径12.0cmを測る。上半には黒色の光沢のある釉が厚めにかかる。胎土は浅黄橙色を呈し精良。焼成は良好。胎土から見て瀬戸天目か。203は落込みのS16出土の白磁底部1/2片。復元底径5.3cmを測る。見込みには灰オリーブ釉がかかるが、高台は露胎、内面は蛇の目状に釉を搔き取るか。204は攪乱S19出土。国産陶器の小壺。底径4.6cm、器高7.3cmを測る。体部外面には化粧土がかかる。色調は浅黄橙色を呈し、胎土は精良、焼成は普通。M2は煙管の雁首。全長5.5cm、最大幅1.2cmを測る。銅製で、錆が進む。205・S13は攪乱SX20出土。205は白磁紅皿1/2片。復元口径4.5cm、器高1.6cmを測る。胎土は白く精良。焼成は良好。S13は砥石片。残存長6.7cm、幅5.3cmを測る。上下・右側面に使用面が残る。206はS45出土。龍泉窯系青磁碗細片で復元口径約16cmを測る。外面雷文、内面はヘラ切り花文に入る。色調はオリーブ灰色釉が厚めにかかる。胎土精良、灰白色を呈し、焼成は良好。207・208は北東隅落込みS46出土。207は坏蓋天井部片。復元口径11.4cm、器高4.0cmを測る。口縁部から天井部まで回転ナデ。ヘラ記号がある。色調は暗青灰色を呈し、胎土は白色微粒子を少量含み、焼成は堅緻。208は須恵器坏身1/8片。受部径13.7cmを測る。底部回転ケズリ、体部から内面は回転ナデ、不整ナデ。色調は青灰色を呈し、胎土は白色。黒色粒子を多く含み、焼成は良好。209・210は埋設攪乱出土。土師器の小皿。1/3片・1/6片で、復元口径8.3cm・9.0cmを測る。器表は摩滅し、調整は不明。外底部は回転系切り。色調は灰白色、橙色を呈し、胎土精良、焼成は186は不良、211は良好。188は遺構面出土。土師器の高环脚部。調整は脚外面はハケ目後ナデ、内部はハケ目。色調は橙色を呈し、胎土は精良、焼成は不良。M3は北東隅壁出土。やや錆びるが銅製の刀の鉤。最大長7.0cm、最大幅5.7cm、厚さ0.8cmを測る。中心に刀を通す孔と、その横に小刀を通す孔が空く。錆造品であり、表裏同じ文様が付く。

各遺構出土瓦 (Fig.35, PL.18)

各遺構から古代の瓦が出土しているが、遺構の時期のものでなく、細片が多い。主なものを図示する。形態は226以外、平瓦（215～225）・丸瓦（227・228）種類は土師質、須恵質の二種類に分かれる。調整は凸面は格子目タタキ、縄目タタキのものがある。凹面には布目が残るものもある。側面はケズリ面取りしている。226は部位は不明だが、中世の瓦類か。両面ケズリ後ナデで、凹線と段が付く。側面はケズリ面取り後ナデ。焼成は良く瓦質で、熨斗瓦のようなものか。

3. おわりに

紙面の都合から、本調査区で検出した中世の地下式壙について述べてまとめとする。地下式壙は地面上を深く掘り下げる大型竪穴であり、北部九州で検出例が近年注目されてきている遺構である。福岡市周辺では那珂遺跡群の他、諸岡遺跡、櫛井川IA遺跡、有田遺跡群、安徳台遺跡群などで検出例がある。この遺構を集成した原田昭一は仏教施設の「やぐら」との関係を考えているが、福岡市周辺検出例では、館跡に伴う例が多く、又、本例も屋敷地に伴うものと考えられる。余り宗教的遺物も出土していない。時期も中世後期頃が中心となる。仏教施設により、館・屋敷に伴う施設（外敵から逃れるための倉庫など）の可能性が強いと考える。地域によって遺構使用の性格が異なる可能性がある。

図 版
(P L)



第105次調査作業風景



(1) 調査区から那珂八幡古墳を臨む（西から）



(2) 1区全景（西から）

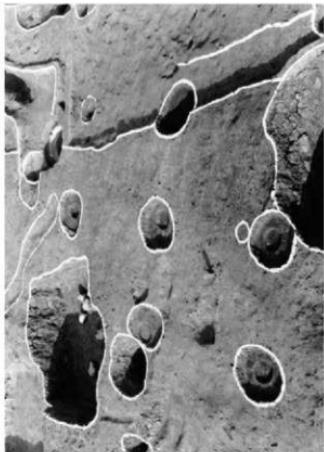
PL. 2



(1) 1区全景(東から)



(2) 2区全景(南から)



(1) SB41 (南から)



(2) SB75 (西から)



(3) 調査区西側住居跡群 (南東から)

PL. 4



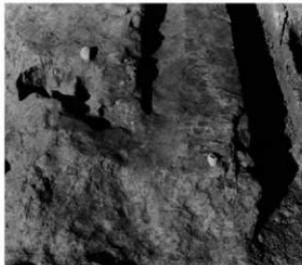
(1) SC38 (南から)



(2) SC54 (南から)



(3) SC25 (西から)



(4) SC38 掘出状況 (南から)



(1) SC59 (南東から)



(2) SC60 (南から)



(3) SC59竈完掘 (南東から)



(4) SC60竈粘土出土状況 (北西から)



(1) SC61(南から)



(2) SC68(南東から)



(3) SC61粘土・焼土出土状況(西から)



(1) SD08・24 (南から)



(2) SD13 北側段落ち (南西から)



(3) SD08 土層 (北から)



(4) 同 遺物出土状況



(1) SD08 コーナー一部東壁（西から）



(2) SD08 陸橋の状況（西から）



(3) SD13 東側（西から）



(4) SD13 西側（東から）



(1) SE37 (東から)



(2) SE66 (南東から)



(1) SE34 (東から)



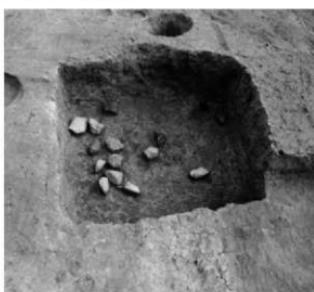
(2) SE53 (東から)



(3) SK05 (北から)



(4) SK06 (南から)



(5) SK10 (北から)



(6) SK11 (北から)



(1) SK12 (南から)



(2) SK49 (南から)



(3) SK17 (北から)



(4) SK17 遺物出土状況



(5) SK48 (西から)



(6) SK71 (東から)



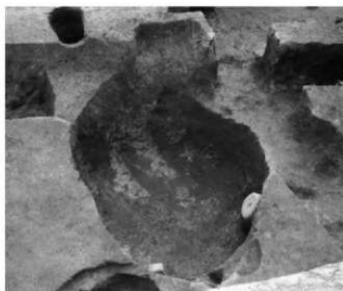
(1) SK50 (北西から)



(2) 同 西壁土層 (東から)



(3) 同 遺物出土状況



(4) SK51 (北から)



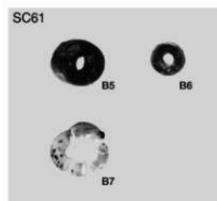
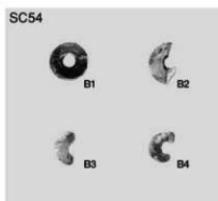
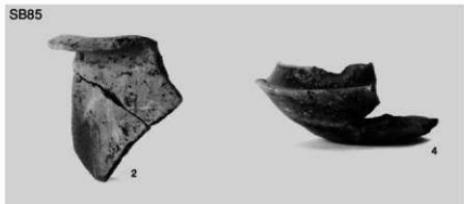
(5) 同 挽き臼出土状況 (東から)



(1) SK56 (東から)



(2) SP292 遺物出土状況 (北から)



(3) 捩立柱建物・竪穴住居跡出土遺物

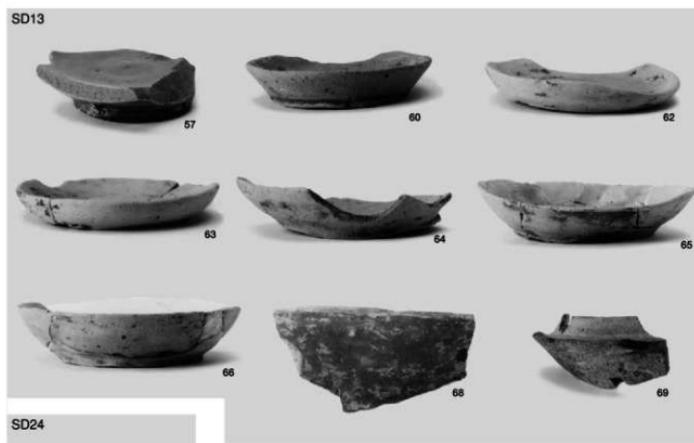
(縮尺不統一)

PL. 14

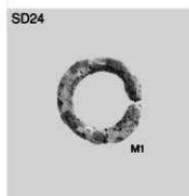
SD08



SD13

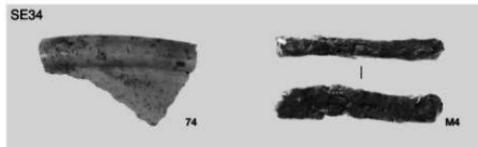


SD24



各溝・井戸出土遺物

SE34

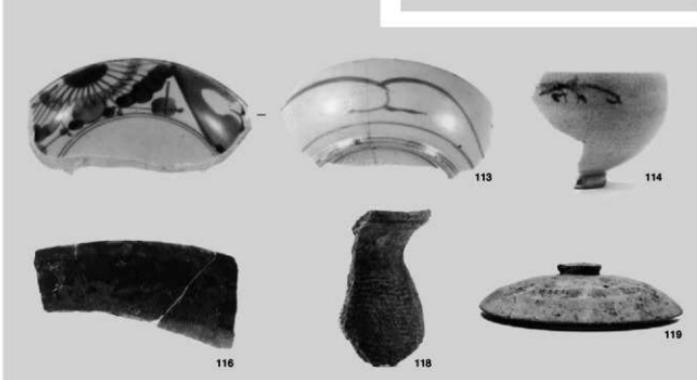


(縮尺不統一)

SE37



SE66

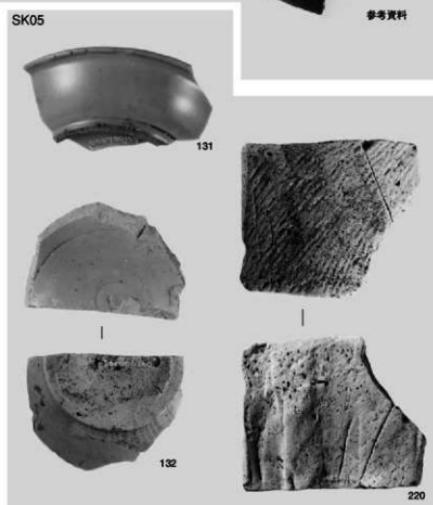


PL. 16

SE66

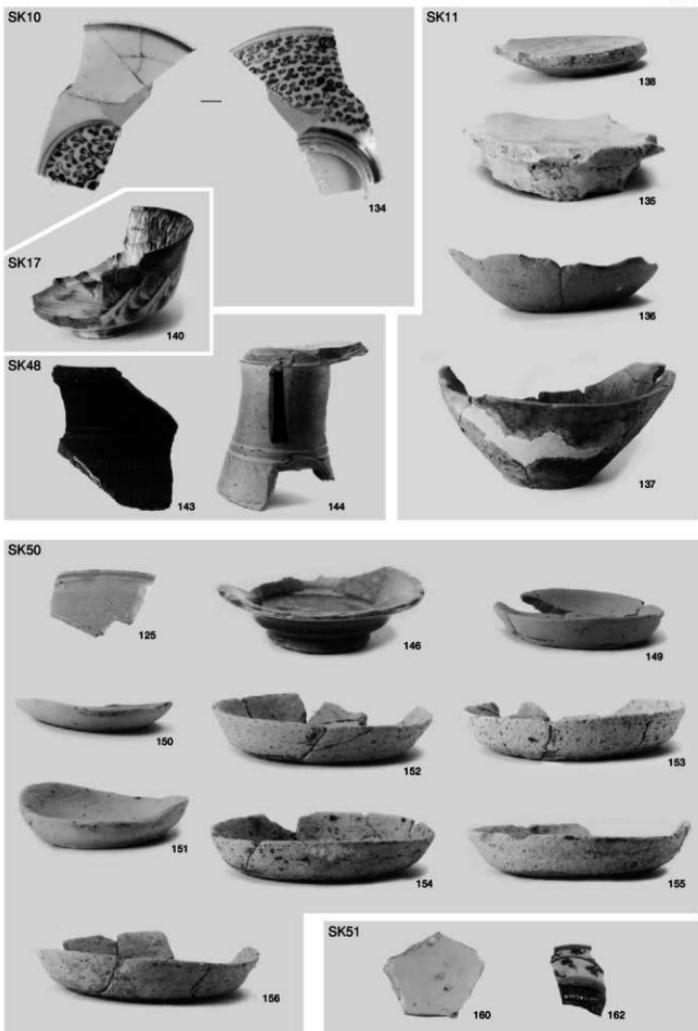


SE34



井戸、各土坑出土遺物①

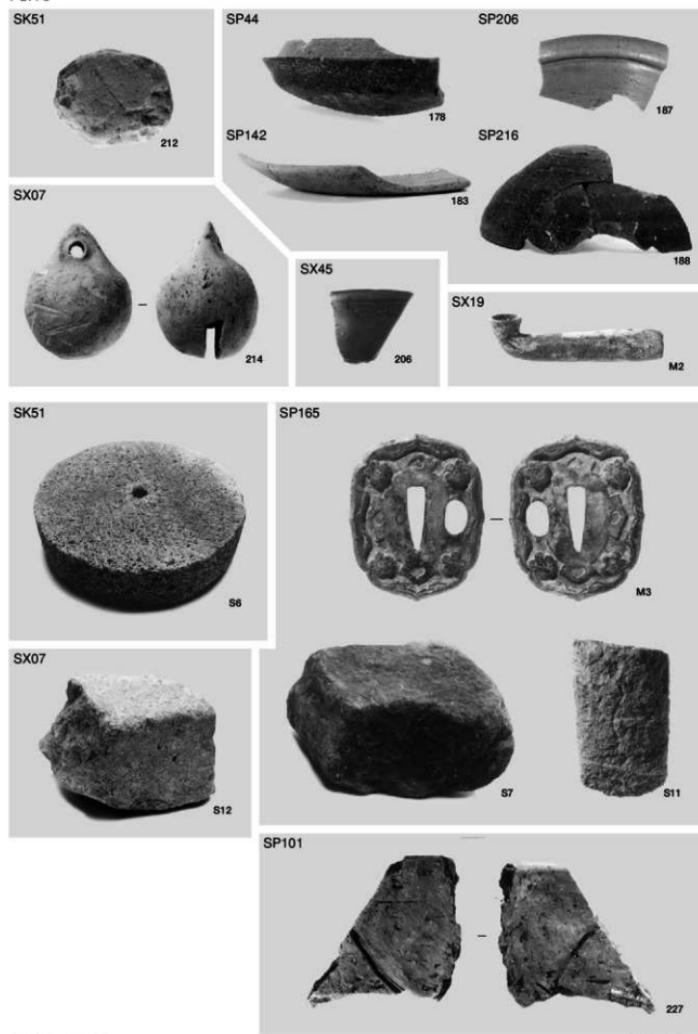
(縮尺不統一)



各土坑出土遺物②

(縮尺不統一)

PL. 18



各遺構出土遺物

(縮尺不統一)

報告書抄録

ふりがな	なかよしゅうろく							
書名	那珂46							
副書名	那珂遺跡群第105次調査報告							
卷次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	936							
編著者名	山崎龍雄							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621福岡市中央区天神1丁目8-1 TEL092-711-4667							
発行年月日	西暦2007年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° °'	東経 ° °'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかよしきぐん だいりやくごじ き2-1 那珂遺跡群 第105次調査	福岡市博多区竹下 5丁目59番1	40132	0128	33°34'11" + 130°26'3" -	20040108 ~20050107	745	共同住宅 建設	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
那珂遺跡群 第105次調査	集落	弥生時代、古墳 時代後葉、中世、 近世	弥生時代~、竪穴式建物1・土坑1/古墳時 代~、竪穴式墓跡8・竪穴柱建物2・土坑 2/中世~漢3・土坑11・井戸2/近世~ 漢2・井戸1	弥生時代~、弥生土器+石器/ 古墳時代~、土師器・漆器 ・装身具/古代~、土師器・須 恵器・瓦/中世~、土師器・繩入 漆器・瓦質土器・繩入 陶器・近世~、国産陶磁器 ・瓦		中世後期の層数の区画溝、 地下式塙など。		
要約	那珂遺跡群中央部西側に位置し、標高は約8mを測る。那珂遺跡群で最も調査が行われている地域であり、調査区の南側も道路建設に先だって調査が行われている。調査区は遺構面の削平を受けたものの、多くの遺構を検出出来た。特に古墳時代後葉と中世の遺構が多い。古墳時代後期竪穴住居跡8棟、中世の屋敷地に伴う溝、地下式塙などが検出された。							

福岡市埋蔵文化財調査報告書第936集

那 珂 46

- 那珂遺跡群第105次調査報告 -

2007(平成19)年3月30日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 久野印刷(株)

福岡市博多区博多駅前2丁目17番1号